「NEVER GIVE UP!」

壽倉　雅

登場人物

沢村　拓真（18）　青竹高校3年2組生徒／生徒会長
時田しおり（18）　青竹高校3年1組生徒／文化祭実行委員長
龍野　芳樹（18）　青竹高校3年2組生徒
吉岡　愛永（18）　青竹高校3年1組生徒
大川　英哉（18）　青竹高校3年3組生徒／新聞部部長

森　誠司（37）　青竹高校3年生副担任
竹平　綾（32）　青竹高校3年1組担任
畑山　美鈴（24）　青竹高校養護教諭
島浦　亮太（18）　青竹高校3年2組生徒
北原　聡子（18）　青竹高校3年1組生徒
水谷　房代（57）　青竹高校3年生学年主任

西園寺静枝（53）　青竹高校校長

柳本　紀之（50）　青竹高校生徒指導主任
松坂　靖雄（45）　青竹高校進路指導主任

木崎　徹（62）　音楽プロデューサー
花井　花凛（17）　青竹高校2年2組生徒／人気アイドル

渡部　香澄（18）　青竹高校3年3組生徒／生徒会副会長
陣内　明（31）　青竹高校3年3組担任
藤倉　昌治（49）　青竹高校教務主任
篠宮　俊作（58）　青竹高校教頭
布施　大吾（35）　青竹高校3年2組担任
高林　梢（33）　青竹高校生徒会主任

○青竹高校・校門前（朝）

自転車が勢いよく通過していく。

○同・廊下（朝）

男子生徒の足――勢いよく走っている。

○同・３年２組教室（朝）

ドアが開き、男子生徒が鞄を投げる――鞄が宙を舞い、机に綺麗に着地する。

それを確認する３年２組生徒（生徒会長）の沢村拓真（１８）。

拓真「（拳を握って）よっしゃー！」

○時田家・しおりの部屋（朝）

パジャマ姿の時田しおり（１８）が熟睡している。スマホの目覚まし機能が鳴る。しおり、目を瞑りながら、手探りで枕の上のスマホを手にする。

しおり、うっすら目を開ける。

スマホに表示される『８：００』。

しおり、慌てて飛び起きて、
しおり「うそー！　何で……！」
と、慌てて布団から出る。

○青竹高校・校門前（朝）
生徒たちが登校している――拓真、３年１組生徒（生徒会副会長）・渡部香澄（１８）、生徒会主任・高林梢（３３）が、朝の挨拶運動をしている。

○道（朝）
自転車を必死に漕いでいるしおり。

○青竹高校・校門前（朝）
拓真、香澄、高林。
昇降口から、生徒指導主任・柳本紀之（５０）がやってくる。
柳本「さて、そろそろ門閉めるか」
高林「もうそんな時間ですか」
拓真「今日も一日始まりますね」

と、自転車を漕いだしおりが、颯爽と
通過していく。
拓真「（しおりに向かって）おいこらぁ、スピード違反だろ！　バカタレ！」
しおり、自転車にブレーキをかけて、
振り返ると、
しおり「うるさい！（と去っていく）」
拓真「あいつー！」
香澄「（真顔で）生徒会長なら、もう少し言葉遣いに気を付けたら？」
拓真「（苦笑して）これを今更直すのは、酷な話だな」
高林「朝からやめてよ、バチバチするの」
拓真「そんなことしませんよ」
と、去っていく――同時に、柳本が門を閉めようとすると、吉岡愛永（１８）が走って登校してくる。
柳本「はい、遅刻」
愛永「ええ。まだ八時三十一分じゃないですか」

柳本「登校完了時間は八時三十分なんだ」
愛永「たった一分じゃないですか」
柳本「されど一分なんだ。バツとして反省文二枚な」
愛永「え～」
柳本「それに、何だそのスカートの丈は。身だしなみがなってないじゃないか」
愛永「どう？　ＪＫの特権、生足よ」
柳本「反省文一枚追加な」
愛永「何でよ！」

○同・廊下

拓真が歩いている――高林が階段を下りてくると、
高林「沢村君」
拓真「あ、梢先生」
高林「……校長先生から、お呼び出し」
拓真「（嫌々）ええ……」
高林「おそらく、私たちが呼ばれる理由は、あれだと思うけど……」

拓真「ですよねぇ……」

○同・校長室

ノック音がし、高林と拓真が入ってくる。

高林「失礼します」

拓真「失礼します」

ソファーごと振り返る校長・西園寺静枝（５３）。

西園寺「沢村君。文化祭の準備をするにあたって、まだ実行委員長が決まってないって聞いたけど」

拓真「その件なら、現在募集をかけているので、近いうちに決まるかと」

西園寺「出し物は何か決まったの？」

拓真「どうでしょ、例えば甘味処出すというのは？」

西園寺「は？」

拓真「すいません」

西園寺「高林先生」

高林「はい」

西園寺「あなたがついていながら、何ということですか。このような進捗状況では、文化祭なんて開催できませんよ。ただでさえ、本校は成績が下降傾向にあって、勉学への時間を削ってまで学校行事を行う意味があるのか考えなければいけないというのに」

高林「……」

西園寺「まあ私としては、下手に文化祭を行うより、勉学に励んでくれたほうがありがたいんですけどね」

拓真「そんな現実的な学校生活送って、生徒たちが楽しめると思いますか？」

西園寺「何ですって？」

高林「沢村君……（とたしなめる）」

拓真「普段勉強をしているからこそ、文化祭という現実逃避ができる時間が必要なんです。僕が今年生徒会長となったからには、僕が文化祭に革命を起こしてみせます！」

西園寺「革命？」

拓真「生徒全員が楽しめる文化祭にします。
それで文句ありませんよね？」
西園寺「できるものなら、どうぞ」
拓真、呆れ顔からの脹れっ面になる。

○同・校長室前の廊下
校長室から出てくる拓真と高林。
拓真「失礼しました」
高林「失礼しました」
と、歩いていく拓真と高林――拓真、
立ち止まって、振り返ると、
拓真「クソババアッ！」
高林「（拓真の口を覆って）何てこと言うの」
拓真「だってあんなこと言われたんですよ。
勉強のことしか頭にない、ただのカタブツ
で冷たいクソババアですよ。感情も表に出
さない氷の女じゃないですか」

○同・校長室
仕事をしている西園寺。

高林の声「青竹高校は、ここ数年、全校レベルで成績が著しく低下してきてるの。校長先生は成績悪化改善のために教育委員会からこの春に着任したから、ある意味では成績を上げることがミッションなのよ」

拓真の声「じゃあそのためなら、僕たちの青春なんかどうでも良いってことですか？」

○同・校長室前の廊下

高林「そういうことじゃなくて……」

拓真「あのドＳが……。名前の通りだな」

高林「どういう意味？」

拓真「西園寺静枝。イニシャルはＳＳ。Ｓが二回。つまりあの性格と一緒で、ドＳってことです」

高林「なるほど」

拓真「何かと因縁つけて、人の上げ足を取るんです。これじゃまるで与党と野党ですよ」

高林「校長先生は、沢村君のことを心配してくれてるの。ちょっと小言が多いお母さん

みたいだと思えばさ」

拓真「お母さん？　あんな女が？　勘弁してくださいよ、何の罰ゲームですか。生まれ変わってもあんな女の息子になるなんてごめんですよ」

と、拓真のお腹がキュルキュルと鳴る。

高林「大丈夫？」

拓真「（お腹を押さえて）ああ、あのクソババアと話してたら、お腹痛くなってきちゃった。ちょっと保健室行ってきます。あ、お腹痛いお腹痛いお腹痛い」

○同・保健室

拓真が入ってくる。男子生徒が群がっている。

拓真「どういう状況？」

養護教諭・畑山美鈴（２４）が、男子生徒たちの養護をしている。

畑山「（男子生徒Ａの額に自分の額を当て）熱下がったわね、もう大丈夫」

男子生徒Ａ「あざっす！（と出ていく）」
畑山、口を怪我した男子生徒Ｂと額を怪我した男子生徒Ｃにそれぞれ絆創膏を張り、
畑山「はい。もう喧嘩なんかしちゃダメだよ。喧嘩はね、ろくでもないクズ男がすることなんだよ。分かった？」
男子生徒Ｂ・Ｃ「（見とれて）はい」
拓真「あの美鈴先生、お腹痛いんですけど、薬ありますか？」
畑山「ちょっと待ってね。（と棚から薬を取り出して）はい、どうぞ」
拓真「ありがとうございます」
畑山「どうしたの。お腹痛いの？」
と、拓真の下腹部をさする。
拓真「……！」
畑山「この辺り？」
拓真「はい……」
と、女子生徒Ａが入ってくると、
女子生徒Ａ「美鈴先生、目薬ありますか？」

畑山「（素っ気なく）そこの棚に入ってるから適当に探して」

拓真「塩対応ッ……」

○同・新聞部部室

部員たちが新聞の編集作業をしている。部長席に座って、パソコンで作業中の大川英哉（１８）――大きな黒縁眼鏡で基本無表情、見るからにカタブツ。顧問席に座って原稿のチェックをしている顧問・森誠司（３７）。

森「大川君。この原稿、ＯＫだよ」

英哉「はい、ありがとうございます」

と、ドアが開き、拓真と高林が入ってくる。

拓真「失礼します」

高林「失礼します」

拓真「ねえ、大川君。この間、新聞に掲載してもらった、文化祭実行委員長募集の件、まだ一件も問い合わせが来てないんだけど、

募集告知のところに記載したメールアドレスが間違ってたとかない？」
英哉「それはありません」
拓真「ホントに？」
森「僕も、それは確認しました」
拓真「そんなバカな……」
英哉「メールも問い合わせも一件も来ていない。これが事実でしょう」
拓真「あのさ、何でそんな毅然とした状態で喋れるの。喜怒哀楽という感情持ってないの？　スクランブル交差点に不法投棄でもしてきた？」
英哉「僕にだってちゃんと喜怒哀楽はありますよ（とニコッと笑う）」
拓真「ああ……笑えるんだね」
スッと真顔に戻る英哉。

○青竹高校・生徒会室
ドアの前にやってくる拓真と高林――
立ち止まる拓真。

高林「どうしたの？」
拓真「何か、足が重いんですけど」
高林「え？」
拓真「梢先生、こういう時の表現って、『敷居が高い』で合ってますか？」
高林「合ってる」
と、ドアを開けようとすると、逆にドアが開き、香澄が真顔で立っている。
拓真、悲鳴を上げて、思わず高林に抱き着く。
拓真「（香澄に）何だ、脅かすなよ」
香澄「どこ行ってたの？」
拓真「新聞部」
香澄「文化祭実行委員長の件、確認してきたんでしょ」
拓真「え……？　まあ、そうだけど」
香澄「これから、どうするの？」
拓真「俺にだって、ちゃんと考えがあるんだから。拓真沢村ネットワーク、略してＴＳネットワークなめんなよ。俺が頼めば、文

化祭実行委員長なんて簡単に決まるんだから」
香澄「じゃあ、今から頼んできてよ」
拓真「え……？」
香澄「今の時間なら、まだ学校に残ってる子いるでしょ」
拓真「（強気に）良いよッ……。任せなさいよ、俺に」
と、去っていく。
高林「あんなふうに煽っちゃって大丈夫なの？」
香澄「あんなこと言うからですよ。私の計算が正しければ、多分、土下座して頼むんじゃないかな」

○同・3年1組教室
呆れ顔のしおり――一緒にいる愛永。
しおり「ねえ、いつまでそんなことしてるの」
お尻を突き出して土下座をしている拓真。

拓真「お願いします！」
しおり「嫌なものは嫌ッ」
拓真「頼むよ。俺がこうして頭下げてるじゃねえか」
しおり「あんたが頭下げたところで、はいそうですかって、私が引き受けると思った？」
拓真「本当に、本当にお願いします。もう悪口言わないからさ。『また太った？』とか『盛りのついたアルパカみたいな顔してんじゃねえか』とか、もう言わないからさ」
愛永「盛りのついたアルパカみたいな顔って、どんな顔よ」
拓真「（しおりを指さして）こういう顔」
しおり、ジロッと拓真を睨みつける。
拓真、目をそらして、また頭を下げる。
愛永「（しおりに）ねえ、文化祭実行委員長やってあげたら？」
しおり「え？」
愛永「私も手伝うからさ。文化祭実行委員って、何だか楽しそうじゃん」

しおり「……」
拓真「（時代劇風に）何卒ッ……何卒、お願い申し上げ奉る……（と深々と頭を下げる）」
しおり「（ため息をついて）しょうがない。やってあげるか」
拓真「（サッと頭を上げて）ホント！？」
しおり「その代わり、実行委員長になったからには、私の言うこと聞いてもらうからね」
拓真「もちろん！　（と立ち上がると）あざっす！」

○同・生徒会室

拓真が、香澄と高林にしおりを紹介している。
拓真「というわけで、この拓真沢村ネットワーク、通称ＴＳネットワークを駆使して、文化祭実行委員長が決まりました。三年一組の時田しおりさんです」
しおり「文化祭実行委員長として頑張ります。

よろしくお願いします」
高林「（笑顔で）よろしく」
香澄「（真顔で）よろしくお願いします」
少し引いているしおり。

○同・校長室（夕）
高林と西園寺が話している。
西園寺「そう。決まったの、実行委員長」
高林「はい。３年１組の時田しおりさん」
西園寺「時田……？　そう。沢村君とどんな風に文化祭に向けて動いていくのかしらね」
高林「そこは、生徒会主任として私が責任をもってフォローに入ります」

○沢村家・拓真の部屋（夜）
拓真がスマホで話している。
拓真「そう。実行委員長が決まったから、実行委員として動いてくれる人は、スムーズに決まると思うんだよ。うちもクラスで、募集呼び掛けてみるから、しおりからも、

いろいろ頼んでみてくれない。あと、愛永ちゃんにも頼んでみてくれないかな」

と、本棚からファッション雑誌を取り出す――表紙を飾る数人のモデルの中に愛永がいる。

拓真「だって、小悪魔系読者モデルでしょ。俺もつい本買っちゃったよ。あの子なら、影響力も間違いないからさ」

しおりの声「確かに愛永の力借りれば相当なものになるかもよ」

拓真「だろ」

しおりの声「ていうかさ、ベランダで話さない？」

拓真「え？」

と、ベランダの方を振り向く――隣の家のベランダから、しおりが手を振っている。

拓真、スマホを耳に当てたまま、ベランダに出る。

拓真「あのさ」

しおり「電話切りなよ」
拓真「それもそうだッ」
×　×　×
ベランダ越しに話す拓真としおり。
しおり「へえ。革命を起こすかぁ」
拓真「あの校長に啖呵切っちゃった以上は、それなりの文化祭にしないとなぁと思ってさ」
しおり「どうしてそんなに文化祭に力入れたいの？」
拓真「文化祭ってさ、三年間のうちに三回あるだろ」
しおり「そうだね」
拓真「けどさ、一年生の文化祭っていうのは一生に一回しかないわけだよ。つまり二年生も三年生も、それぞれ一生に一回しかない。一年生も二年生も三年生も、その年だからこその文化祭を楽しんでほしいんだよ」
しおり「すげえ……当たり前のこと言ってるはずなのに、すごく良いこと言ってるよう

に聞こえる」

拓真「特に俺たちは、後にも先にも今年が最後の文化祭になる。だから……史上最大で史上最高の文化祭にしたいんだよ！」

しおり「そう……。分かった。私、拓真のその想い、汲み取った！」

拓真「しおり……」

しおり「必ず、この文化祭、成功させよう！」

拓真「うんッ……」

ハイタッチをする拓真としおり。

○青竹高校・校門前（朝）

生徒たちが登校している――自転車で勢いよく通過していくしおり。

○同・駐輪場（朝）

しおりが自転車を漕いでいる――目の前に人が現れ、急ブレーキをする――その反動で倒れる３年２組生徒・龍野芳樹（１８）。

芳樹「いってぇー……」
しおり、慌てて自転車から降りると、
芳樹に駆け寄って、
しおり「大丈夫ですか……」
芳樹、しおりに思わず見とれる。
○同・保健室（朝）
芳樹、手首をすりむいている――怪我の手当てをしているしおり。
そのしおりを、じっと見ている芳樹。
しおり「大丈夫？　ごめんね」
芳樹「いや、全然……。ありがとう」
しおり「ううん」
芳樹「……」
と、しおりをチラッと見る――しおり、リップクリームを塗る。呆然と見とれている芳樹。
しおり「どうしたの？」
芳樹「いや……別に」
しおり「じゃあ、私行くね。本当にごめんね」

と、去っていく――まだ見とれている
芳樹。
入れ違いで畑山が戻ってくる。
畑山「どうしたの？　……って、鼻血出てるッ……！」
鼻血が出ている芳樹――全く動じず。
○同・３年２組教室
生徒たちがそれぞれ勉強や井戸端会議をしている――その中で、拓真がクラスメイトの島浦亮太（１８）と話している。
亮太「それでさ、ようやく付き合うことができたんだよ」
拓真「やったじゃねえか」
亮太「拓真に背中押してもらったおかげだよ。やっぱり、最後まで諦めないことって大事だな」
拓真「そうそう。何事も諦めないことが大事。ＮＥＶＥＲ　ＧＩＶＥ　ＵＰ！っていうの

が、うちの家訓なんだよ」
亮太「へえ、そうなんだ」
と、鼻栓をした芳樹が入ってくる。
亮太「おはよう。（と芳樹を見て）どうした、鼻血か？」
芳樹「ああ。急に出てきちゃって」
拓真「芳樹は一体朝から何をそんなに興奮してるんだよ」
芳樹「そういうわけじゃないんだけどなぁ」
亮太「（芳樹の手首を見て）それ、どうしたんだよ」
芳樹「ああ、これ？　さっき自転車とぶつかりそうになって転んじゃったんだよ」
亮太「あぶねえ運転する奴もいるんだな」
芳樹「あの子は、確か一組の時田しおりって子じゃないかな」
拓真「もしかして、自転車かっ飛ばしてた女？」
芳樹「ああ、そうそう」
拓真「あいつ……。だからスピード出すなっ

ていつも言ってるのに」
芳樹「知り合いなのか？」
拓真「まあね。それに、今年の文化祭実行委員長になったんだよ」
亮太「無事に決まったんだ、実行委員長」
拓真「まあ、ここだけの話、俺が土下座して頼んだ」
亮太「リーダーは、やりたがらないもんな」
拓真「どう？　芳樹も亮太も、実行委員一緒にやらない？」
芳樹「やるッ」
拓真「即答じゃねえか。（と亮太に）どう？」
亮太「俺？　最後の夏の大会控えてるから、そんなに役には立てないかもしれないけど、俺で良ければ」
拓真「ありがとうッ。よくぞ、よくぞ言うてくだされた」
芳樹「何で時代劇なんだよ」

○同・職員室

３年生学年団で会議が行われている―
―３年生学年主任・水谷房代（５７）
が話しており、３年１組担任・竹平綾
（３２）、３年２組担任・布施大吾
（３５）、３年３組担任・陣内明（３
１）、３年生副担任である森が書類を
見ながら聞いている。

水谷「まもなく１学期の期末試験となります。
中間試験よりも、各クラス平均点が上がる
ように、先生方においては授業においても
工夫をお願いできればと思います」

一同「はい」

水谷「続いてですが、文化祭実行委員長が決
まりました。三年一組の時田しおりさんで
す。竹平先生、担任としてフォローお願い
しますね」

竹平「分かりました」

水谷「また、文化祭は生徒会が主幹となって
行う前期最大のイベントとなります。布施
先生、生徒会長の沢村君のバックアップ、

生徒会主任の高林先生と協力して、お願いします」

布施「はい」

水谷「文化祭の広報は、新聞部の協力が必要です。生徒会から既に依頼が来ていると思いますが、新聞部の顧問として森先生、生徒たちの補助をしっかりお願いします。また、新聞部長の大川君は、三年三組です。陣内先生、部活とテストの両立がちゃんとできるようにフォロー入ってください」

森「はい」

陣内「はい」

水谷「学年団会議は以上です。今日も一日よろしくお願いします」

一同「よろしくお願いします」

○同・校長室

西園寺が、教頭・篠宮俊作（５８）、教務主任・藤倉昌治（４９）と話している。

西園寺「今回の期末テストの結果を見て、今後のことを判断したいと思います。教頭先生からも、藤倉先生からも教務主任として、またご意見をいただきたいと思いますので、そのつもりでお願いします」

篠宮「承知しました」

藤倉「はい。校長のお好きなような改革を」

不審そうに藤倉を見る篠宮。

○同・男子トイレ

英哉が手を洗っている。

水の流れる音――個室から、お腹をさすりながら拓真が出てくる。

英哉「腹痛ですか？」

拓真「まあね……」

英哉「体調管理はしっかりとお願いしますよ」

拓真「（ムッとして）分かってるよ、そんなこと」

○同・保健室

畑山が仕事をしている――拓真が入ってくる。

拓真「失礼します」

畑山「あれ、沢村君。どうしたの？」

拓真「昨日の腹痛がまだ……」

畑山「何か変なもの食べた？」

拓真「いや」

畑山「じゃあ、ストレスからくるものかな」

拓真「ストレス？」

畑山「何か心当たりある？」

拓真「そうですねぇ……」

×　×　×

〈フラッシュ〉

校長室の西園寺。

西園寺「できるものなら、どうぞ」

×　×　×

寒気を感じる拓真。

拓真「ああ、すごく心当たりあります」

畑山「じゃあ、何とか解消させないとね」

拓真「それができたら苦労しません」

畑山「ああ、人間関係？　生徒会長も大変ね」
拓真「まあ……」
畑山「人間関係で悩んでる沢村君にこんなこと聞くのなんだけど、私の良いところってどこかな？」
拓真「急にどうしたんですか？」
畑山「実はさ、最近マッチングアプリ始めたんだけど、自己分析しようと思っても自分の良いところとか悪いところって、具体的に何だろうと思って」
拓真「なるほど」
畑山「どこだと思う」
拓真「良いところですよね？」
畑山「うん」
拓真「えっと……（と悩みながら）まず、可愛いところでしょ」
畑山「（スマホにメモしながら）うんうん」
拓真「あと……スキンシップがすごいところ」
畑山「ほうほう」
拓真「あと強いて言えば……」

畑山「強いて言えば？」
拓真「（慌てて）ああ、いやいや……えっと……、あ、化粧のノリが良いところ」
畑山「なるほどね。逆に悪いところは？」
拓真「そんなのいくらでもありますよ」
畑山「（不機嫌な顔で）……」
拓真「（指折り数えながら）化粧が濃いでしょ、香水が臭いでしょ、女子に対して塩対応でしょ、鼻歌が音痴でしょ、口が悪いでしょ、それから……」
畑山「（勢いよく掴みかかって）もっかい言ってみろや、クソガキッ！」
拓真「（泣き顔で）そういうとこ……」

○同・3年2組教室
昼食を食べている生徒たち――拓真、芳樹、亮太が机を囲んで弁当を食べている。
芳樹「そりゃ美鈴先生怒るわ」
拓真「ガチで怖かった。あれは、人や動物を

何人も何匹もあの世に送ってるんじゃないかな」

亮太「知らないの。美鈴ちゃんの話」

拓真「え？　前科三犯」

亮太「ちげえよ。美鈴ちゃん、元ヤンらしいよ」

拓真「はッ……？」

芳樹「やっぱりあの噂本当だったんだ」

亮太「しかもテッペンだったって」

拓真「マジすか……」

×　×　×

イメージ。

ロングスカートの制服で、竹刀を振り回し、喧嘩をしている美鈴。

×　×　×

拓真「（何故か訛って）人は見かけによらねえな」

亮太「強い女って良いよな」

芳樹「分かるわぁ」

拓真「けど、強すぎてもねぇ」

と、亮太のスマホに通知が来る。亮太、スマホを見ると、

亮太「よっしゃー！　デート行きたいって、ＬＩＮＥが来た！」

と、スマホを机に置く。その画面を上から覗き込む拓真、芳樹、亮太。

ＬＩＮＥ『私もしたい！　デートしよう』

拓真「やいやいやい、順調じゃねえの」

亮太「まあねぇ」

芳樹「（呟くように）よし、俺も頑張るか」

○同・廊下

しおり、愛永、クラスメイト・北原聡子（１８）が、それぞれ教科書を持って歩いている。

愛永「ねえ、文化祭の準備ってそろそろ始まるの？」

しおり「うん。今日、拓真と相談する予定」

愛永「（聡子に）ねえ、聡子も一緒にやらな

い？　学園祭実行委員会」
聡子「私？」
しおり「そうだよ。聡子も一緒にやろうよ」
愛永「でもサッカー部のマネージャーだと忙しいか。夏の大会だってあるだろうし」
聡子「何とかなるよ。私は、何やれば良いのかな？」
しおり「それは、まだこれから決めるんだけどね」
と、階段を上ってくる柳本。
柳本「（愛永を見て）おい、吉岡。反省文まだ提出してないじゃないか」
愛永「出さないとダメですか？」
柳本「当たり前だろ。それにお前、最近全然部活に顔出さないじゃないか」
愛永「だってつまらないんだもん」
柳本「書道部が嫌なら、転部しても良いんだぞ」
しおり「先生、そんな冷たいこと……」
柳本「ま、とにかく反省文は今週中に提出。

分かったな（と去っていく）」
聡子「あれで書道部の顧問って、なんか意外だね」
愛永「だから余計にめんどいの」
聡子「どうして？」
愛永「反省文の字が汚いとやり直しされるの」
×　×　×
〈イメージ〉
生徒指導室にて。
反省文を見せる柳本。
柳本「字には性格が出る。反省してない、やり直し！」
×　×　×
聡子「ああ、分かる気がする」
愛永「書きたくない気持ち、察して」
聡子「うん」
と、反対側から拓真、芳樹、亮太が歩いてくる。
しおり「（芳樹に）今朝はごめんなさい」
芳樹「いや、別に……」

拓真「芳樹から聞いたよ。何てことしてくれたんだよ」
芳樹「もう良いんだよ」
拓真「こいつの自転車の運転は本当に危ないんだよ。これからも気をつけないと、今度はどこ怪我するか」
芳樹「俺は全然大丈夫だから」
拓真「まあ、芳樹がそこまで言うなら」
しおり「じゃあ」
亮太が聡子に目配せをする――頷く聡子。それぞれ歩いていく拓真一行と、しおり一行。
芳樹「なあ、もしかしてデートする相手って」
亮太「ああ、あの子」
拓真「北原聡子って言ったっけ。確かサッカー部のマネージャーの」
亮太「さすが生徒会長。詳しいな」
芳樹「サッカー部員とマネージャーの恋ってやつか。良いねぇ」
一人険しい顔の拓真。

○同・生徒会室

棚から資料やファイルを取り出して見ている拓真――高林が入ってくる。

高林「あれ、沢村君。どうしたの？」

拓真「梢先生。部活の規約が書いたファイルって、どこにありましたっけ？」

高林「どうしたの急に？」

拓真「確かどっかの部活で、部員内の恋愛を禁止にしてるところがありましたよね」

高林「ああ、それサッカー部だよ」

拓真「先生どうして知ってるんですか？」

高林「私、名前だけの副顧問だから」

拓真「そうなんですか？」

高林「確か、こっちの棚じゃなかったかな」

と、下の棚を開けると、ファイルを取り出す。

高林「あったあった。はい、これ」

拓真と高林、一緒にファイルを見る。

高林「ほら、顧問のところに名前書いてある

でしょ」

拓真「ホントだ。『顧問・布施大吾　副顧問・高林梢』」

高林「（書類の下の方を指して）ここに書いてあるでしょ。部活内の恋愛は禁止って。私や大吾先生が赴任したときには、既にこのルールは決まってたから、随分前から続いてる規約みたいね」

拓真「……」

高林「それがどうかしたの？」

拓真「いえ……ちょっと気になったことがあったので」

高林「あ、そういえば、映像同好会から、部員数が増えたから部に昇格したいって書類出してきた。名前も変えたいって」

と、机から書類を見つけると、拓真に渡す――拓真、書類を見る。

高林「部活名は、ゆーちゅー部」

拓真「まんまじぇねえか！」

○同・運動場

サッカー部が部活をしている。その中にいる亮太――熱血指導中の布施。端のほうでビブスを畳んでいる聡子。

布施「ちゃんとボール見ろ！」

亮太「はい！」

布施「ほら、もっと走れ！」

聡子、亮太の様子を見守っている。

○同・サッカー部部室

聡子が片付けをしている――亮太が入ってくる。

聡子「お疲れ様」

亮太「ああ、今日も疲れたわ……」

聡子「大吾先生、熱血だもんね」

亮太「まあな」

聡子「はい。スポーツドリンク（とペットボトルの容器を渡す）」

亮太、ドリンクをがぶ飲み。

亮太「ありがとう。デートのこと」

聡子「だって、嬉しいから」
亮太「そっか」
見つめ合う亮太と聡子――そこへ、拓真と芳樹が入ってくる。
拓真「ごめん、入るよ」
亮太「何だよ、二人ともタイミング悪いな」
芳樹「そう呑気なこと言ってられないんだよ」
拓真「（芳樹に）ドア閉めて」
芳樹「ＯＫ！（とドアを閉める）」
亮太「何事だよ、一体？」
拓真「ちょっと、二人に話があって。事情を知ってる芳樹にも同席してもらった」
聡子「何かあったの？」
芳樹「二人のことは、心から応援したい。それは俺も拓真も一緒。でも、それには相当なリスクが伴うんだ」
亮太「リスク？」
拓真「これを見てほしい」
と、部活動規約の書類のコピーを見せる。

拓真「サッカー部の部活動規約。（とラインを引いた箇所を指さして）ここ見て。『部活内での恋愛は禁止。発覚した場合は該当者を謹慎処分とする』って書いてある」

亮太「（慌てて書類を手にして）嘘だろ。今時こんなルールが、うちの部活に……」

聡子「そんな……」

芳樹「それに、サッカー部の顧問は俺たちの担任でもある大吾だ。お前の様子に気づく可能性は十分に高い」

拓真「だから、もし二人で会うときは、くれぐれも慎重に。付き合ってるってことが、諭されないように。良いね」

難しい顔で顔を見合う亮太と聡子。

○時田家・しおりの部屋

ベッドに寝転がって漫画を読んでいるしおり――と、スマホに通知が来る。

しおり、起き上がって、スマホを手にする。

しおり「え……？」

○青竹高校・全景（翌朝）

○同・駐輪場

芳樹が待っている――自転車を漕いだしおりがやってくる。

芳樹「おはよう」

しおり「おはよう」

芳樹「ごめん。昨日、いきなりあんなＤＭ送っちゃって」

しおり「大丈夫。ちょっとびっくりしたけど」

芳樹「あのさ……」

しおり「……？」

芳樹「俺と付き合ってくれませんか。俺、ひとめぼれしちゃったんです」

しおり「……」

芳樹「お願いします！（と深々と頭を下げる）」

しおり「私なんかで良ければ……」

芳樹「（ハッと頭を上げて）ホントッ……？」
しおり「はいッ……」
芳樹「よっしゃー！　あざっす！」
笑顔で微笑んでいるしおり。

○同・昇降口
拓真が靴に履き替えている――しおりが入ってくる。
拓真「あれ、今朝は随分早いじゃん」
しおり「え……？　うん、まあね。そっちは、これから挨拶運動？」
拓真「ああ」
しおり「行ってらっしゃい」
拓真「行ってきます。（と何かを思い出して）あ、そうだ。しおり」
しおり「何？」
拓真「今週末、文化祭の出し物の相談しよう。芳樹と愛永と聡子と亮太も集めて」
しおり「ＯＫ！」

○沢村家・玄関（数日後）

インターホンが鳴る。

拓真の声「はーい」

と、拓真がドアを開ける――芳樹、愛永、聡子、亮太が立っている。

拓真「おいでませ、沢村家」

○同・拓真の部屋

拓真、芳樹、愛永、聡子、亮太が入る。

拓真「さ、どうぞ」

一同「お邪魔します」

拓真「ちょっと待っててて。今、ジュース持ってきてあげるから」

○同・リビング

拓真、台所で六人分のグラスを用意し、冷蔵庫からオレンジジュースを出して、グラスに注ぐ。と、二階の拓真の部屋から芳樹、愛永、聡子、亮太の悲鳴が聞こえる。

拓真「え……？　まさかッ……」
と、慌てて飛び出していく。

○同・拓真の部屋
駆け上がってきた拓真、勢いよくドアを開ける。
唖然としている芳樹、愛永、聡子、亮太――目線の先のベランダに立っているしおり。
拓真「（ベランダの鍵を開けると）お前、どっから入ってきてんだよ」
しおり「だって、どうせ拓真の部屋に行くんなら、ベランダから来たほうが早いじゃん。一回外出て、拓真の家の玄関入るより」
芳樹「え、どういうこと？」
しおり「私の家、すぐ隣なの。だから、来ようと思えばすぐ来れるってわけ」
拓真「だからって、こんな風に出てきたらびっくりするだろうが」
しおり「これから頻繁に拓真と相談すること

も多いかなと思って、はしごかけといた」
拓真「は？」
と、ベランダを覗く――両家のベランダにはしごがかけられている。
拓真「何てことしてんだよ」
しおり「便利でしょ」
拓真「じゃあ、俺も頻繁にそっちの部屋行くぞ」
しおり「良いよ」
芳樹「え？」
拓真「言ったな？　本当に行くからな」

×　×　×

時間経過。
拓真、しおり、芳樹、愛永、聡子、亮太が話し合っている。
拓真、おちょぼ口になって、鼻と口の間にペンを挟んでいる。
拓真「出し物、どうしようかな」
しおり「ステージ企画だよねぇ」
芳樹「みんなが楽しんでもらえる内容って何

があるんだよ」

聡子「あ、例えば手品とかどう？」

○ステージ（イメージ）

タキシード姿の拓真と芳樹が、口ひげをつけてヒゲダンスをしている。

舞台中央に置いてあるリンゴを持つ拓真と、サーベルを手にする芳樹。

拓真、リンゴを投げる――サーベルにリンゴを指す芳樹。

拓真「イエーイ」

と、楽しそうにヒゲダンス――芳樹、拓真にサーベルを渡す。受け取る拓真。

芳樹、リンゴを持つと、構えて、そのまま投げる――サーベルにうまく刺さらず、へこむ拓真。

○沢村家・拓真の部屋

拓真「難しいね」

亮太「チョイスの古さよ」

しおり「練習は必要よね」
芳樹「覚えるというよりかは、技術の問題だよなぁ」
愛永「じゃあ、漫才とかはどう？」

○ステージ（イメージ）
花がたくさんついた派手なドレスを着ている拓真と、ロングスカートのドレスを着た芳樹が、センターマイクに来る。

拓真・芳樹「どうもどうも」
拓真「いやあ、今日は素敵なお客さんたちが来てくれて」
芳樹「本当よね。べっぴんさん、べっぴんさん、一つ飛ばして、べっぴんさん」
拓真「飛ばしてどないすんねん。どやさや、それ、ほんまどやさや」
芳樹「あんた何ちゅう格好してんねん。こんなところから足出して」
拓真「腕やっちゅうねん。どやさや、どやさ。

ほんまどやさや、それ」

○沢村家・拓真の部屋

拓真「女装はなかなかハードル高くない？」

芳樹「それで漫才となるとね」

亮太「だから、チョイスの古さ」

しおり「あ、じゃあピンでやるのは？」

亮太「なるほど、ピンね」

愛永「例えば？」

しおり「そうだねぇ」

○ステージ（イメージ）

『ろくでなし』の前奏と共に、派手なメイクにロングドレスを着た拓真が上手から入ってくる。歌いながら、随時鼻に豆を詰めて飛ばすことを繰り返す。

○沢村家・拓真の部屋

芳樹「それ良いな」

しおり「でしょ」

愛永「大分体張ったね」
聡子「でもその方が面白い」
亮太「いや、だから、チョイスの古さ」
拓真「もうやめよ。もう少しまともな企画にする！」

○同・玄関

芳樹、愛永、聡子、亮太が出てくる――見送る拓真としおり。

拓真「みんな今日はありがとう。おかげで良い企画ができて良かった」
愛永「良いってこと」
聡子「これからみんなで頑張ろうね」
亮太「じゃあ、また明後日学校で」
芳樹「おお」
拓真「じゃあね、みんな」

と、それぞれ帰っていく――鍵を閉める拓真。

しおり「じゃあ、私はベランダから帰ります」

と、階段を上っていく。

拓真「はしご撤去しとけよ」
しおりの声「やだッ！」
呆れ顔の拓真。

○時田家・しおりの部屋
沢村家のベランダから戻ってくるしおり――と、一階からインターホンが聞こえる。

○同・玄関
しおりが鍵を開ける――芳樹が立っている。
しおり「どうしたの？」
芳樹「二人で会いたくて……。俺、知らなかった。拓真の家の隣だなんて」
しおり「あ、ごめん。言ってなかったね」
芳樹「いや、良いんだよ。けど、ちょっと驚いた」
しおり「上がってきなよ。せっかくだし」

○同・しおりの部屋

幼少期のしおりの写真が飾られている写真立てを見る芳樹――しおりが入ってくる。

芳樹「これ、昔のしおり？」

しおり「（慌てて）あ、やめて、恥ずかしいから！」

いきなり抱き着かれてバランスを崩し、ベッドへ倒れこむ――芳樹の上になり、ベッドドンをするしおり。

顔が至近距離になり、思わず見つめ合うしおりと芳樹。

と、体勢を入れ替えて、芳樹が覆いかぶさると、

芳樹「しおり……」

しおり「芳樹……」

と、抱き寄せようとすると、インターホンが鳴る。

○同・玄関

拓真が来ており、しおりに封筒を渡す。
拓真「うちのポストに、紛れ込んでた。しおりのお母さん宛の郵便」
しおり「（息を荒くして）ああ……ありがとう……」

○同・しおりの部屋
芳樹が待っている――しおりが入ってくる。
しおり「ごめん」
芳樹「大丈夫か？」
しおり「うん……芳樹！」
芳樹「しおり！」
と、ベッドに倒れこむが、またインターホンが鳴る。

○同・玄関
拓真がまた来ており、回覧板をしおりに渡す。
拓真「ごめん。回覧板渡すの忘れてた」

しおり「（息を切らして）良いよ……」
拓真「どうした？」
しおり「ううん……何でもない」
拓真「じゃ（と出ていく）」

○同・しおりの部屋
服が乱れている芳樹が待っている――
しおりが戻ってくる。
芳樹「……」
しおり「タイミングと時間ってものがあるね。テスト勉強しよっか。週明けからテストだし」

○沢村家・全景（夜）

○同・リビング（夜）
急須のお茶を湯呑みに入れ、白米の入ったお茶碗にお茶を入れる拓真。
拓真「いただきます」
と、タッパーに入れてあるアサリの佃

煮を食べながら、茶漬けにした白米をかきこむ。
思い切りむせて咳き込む拓真――慌てて湯呑みのお茶を飲む。
拓真「あっつ！」

○時田家・しおりの部屋（夜）
円卓に顔を伏せている芳樹――しおり、起こさないようにゆっくり立ち上がると、出ていく。
熟睡したままの芳樹。
×　×　×
時間経過。
芳樹が目を覚ます。しおりがいないことに気づく。
芳樹「寝ちゃったんだ、俺……」
と、荷物をまとめて帰る支度をする。
ドアが開く。
芳樹「（立ち上がって）寝ちゃって、ごめん。俺、帰るわ」

と、振り返ると、唖然となり鞄を落とす――風呂上がりのしおりが立っている。

芳樹「……」

しおり「今日、母さん泊りがけでおばあちゃんのとこ行ってるんだ」

芳樹「……」

と、芳樹の胸に抱き着く。

しおり「泊まってってよ」

芳樹「え……いや……その……え……ダメ……だって……」

二人の足元にバスタオルが落ちる。

○同・全景（夜）

しおりの声「本当は一晩中一緒にいたいくせに」

間。

芳樹の声「しおりーーーーーーーー！」

○沢村家・拓真の部屋（夜）

試験勉強中の拓真――聞こえるはずがないが反応する。

拓真「ん？」

○青竹高校・新聞部部室（数日後）

作業をしている英哉――メモ書きを渡す拓真。

英哉「何ですか、これは？」

拓真「文化祭でやる企画。ミスコン、有志発表、クラス出し物。その中で、ミスコンと有志発表の出場者の募集をしようと思って。一学期の期末試験も無事に終わったことだし、もう告知しても良いって梢先生からの許可も下りたから」

英哉「（メモを見ながら）有志発表、ミスコンＤＫ＆ＪＫ」

拓真「ＤＫってちなみにダイニングキッチンの略じゃないからね」

英哉「分かってます」

拓真「不思議だよね。よくさ、高校三年の女

子のことをラストＪＫの略でＬＪＫって言うじゃん。一年生はファーストＪＫの略でＦＪＫ、二年生はセカンドＪＫの略でＳＪＫ。ということは、その流れで行けば、三年生はサードＪＫの略でＴＪＫって表現するほうが正しいのに、そこだけラストって表現してるんだよ」

英哉「まあ、言われてみれば」

拓真「あれかな、ＴＪＫだと卵かけご飯と間違えやすいからかな」

英哉「それはＴＫＧですね」

拓真「ほら、やっぱりＧとＪの言い方が紛らわしいんじゃないかな」

英哉「別にどうでも良いですけど」

拓真「実はさ、この企画考えてるときに面白いこと気づいちゃったんだけど、高校三年の女子高生がＬＪＫじゃん。ということは高校三年の男子高生はＬＤＫになって、三人揃ったら三ＬＤＫになるんだよ（と高らかに笑う）」

英哉「（呆れ顔で）……」
拓真「（何事もなかったように）それでさ、
このミスコンと有志発表の出場者募集の記
事掲載は、できるだけ早めにお願いしたい」
英哉「分かりました」
拓真「それとさ」
英哉「まだ何か？」
拓真「良かったら、文化祭実行委員会、一緒
にやらない？　新聞部の部長である大川君
なら、ぜひ広報部隊として宣伝に力を入れ
てくれるとありがたいんだけど」
英哉「分かりました。新聞部の仕事の範囲内
だったら協力します」
拓真「ありがとう！　（と後ろから抱き着き）
そういうブレない精神大好きよ！」
英哉「（不服そうに）……」

○同・廊下～家庭科室

拓真が通りかかる――家庭科室のドア
の前で中の様子をうかがっているしお

りと愛永。

拓真「どうしたの？」

しおり「（慌てて口に手を当てて）しーッ！」

拓真「（小声で）どうしたんだよ？」

愛永「（家庭科室の中を指して）あれあれ」

拓真、部屋を覗く――カーテンの中でくるまっている二人のシルエット。

拓真「え……」

トーテムポールのように顔を並べて見ている拓真、しおり、愛永。しばらく様子を見ている――やがて、カーテンが動き、中から人が出てきそうになる。

愛永「やばッ……隠れよう」

と、慌てて廊下突き当りの男子トイレと女子トイレにそれぞれ隠れる拓真、しおり、愛永。人影、そのまま廊下を通り過ぎて姿を消す。

その入れ違いでそれぞれトイレから出てくる拓真、しおり、愛永。

しおり「誰だったんだろう」

拓真「……」
愛永「学校で、随分大胆なことしてるね」
しおり「生徒会長として、どう思う？」
拓真「まあ、そういうこともあるよ」
しおり「あれ、えらく寛容じゃん」
拓真「え？　まあね……」

○同・進路指導室

しおりが進路希望調査表を提出している――受け取る進路指導主任・松坂靖雄（４５）。

しおり「すいません、進路希望調査表遅くなって。よろしくお願いします」
松坂「確かに。書類の提出は早めにね」
しおり「はい」
松坂「そういえば、文化祭実行委員長になったそうじゃないか」
しおり「頼まれたんですけどね。拓真に」
松坂「ああ、生徒会長の」
しおり「でも意外とやってみると楽しいもん

ですよ。いろんな子と、準備に向けて動いていく、この工程っていうか」
松坂「（ボソッと）ただ、気をつけなよ」
しおり「え？」
松坂「邪魔が入る可能性がある」
しおり「はぁ……」
松坂「しかも、その邪魔は二回ある」
しおり「二回……？」

○同・生徒会室
拓真、しおり、高林が話している。
拓真「え、ダムスがそんなこと言ったの？」
しおり「うん。邪魔が入ることが、具体的にどういうことは分かんないんだけど」
拓真「けど、ダムスの言うことって、結構当たるからな」
しおり「そうだよね。ダムスがたまにボソッと言うことに限って、的中するんだよね」
拓真「どういう邪魔が入るのか気になるな。しかも二回って言うのが、引っ掛かる」

高林「ねえ、さっきからダムスダムス言ってるけど、何の話？」
しおり「進路指導主任の松坂先生のことですよ」
高林「え、靖雄先生のニックネーム？」
拓真「昔、ノストラダムスの大予言ってあったでしょ。松坂先生が発する言葉って、結構な確率で的中するんです。だから、ダムス」
高林「簡易的につけたんだね」
拓真「新聞部にも提案してみたんですよ。『マツザカダムスの大予言』っていう連載コーナー作ってみたら良いのに、って」
高林「そしたら？」
拓真「大川君に『そんな根拠のない情報なんて記事にできるわけがないでしょ！』ってすっげえ怒られました（と笑う）」
高林「まあ、あの子ならそう言いかねないね」
拓真「でも、騙されたと思って一度、松坂先生に何か相談してみたら良いですよ。占い

師だと思って」
高林「沢村君は、何か当たったの？」
拓真「それこそ、去年の生徒会選挙のときに、『君は当選するよ』って言われました」
高林「さすがに選挙に落ちるとは言えないでしょ。生徒に対して」
拓真「と思うじゃないですか？」
高林「何かあるの？」
拓真「香澄は、選挙に落ちるって言われたんですって（とケラケラと笑い出す）」
しおりと高林、段々と真顔になる――
拓真の背後に人影。
拓真「（笑いながら）それで動揺しちゃったんじゃないんですかね。いくらダムスに言われたからって、そんなことで弱気になってちゃあねぇ」
と、香澄の声がする。
香澄の声「誰が、弱気ですって」
拓真、笑いがピタッと止まり、ゆっくり真顔になる――そのまま顔を上へ向

けると、香澄に両頬を掴まれる。
拓真「うッ……」
香澄「別に弱気になってないし」
拓真「ごめん……なしゃい……」
香澄「何だって？」
拓真「ごめんなしゃい……」
香澄「聞こえないッ」
香澄、更に強く拓真の両頬を掴む。
拓真「痛い痛い痛い痛い痛い」
哀れむように拓真を見ているしおりと高林。

○同・校長室
険しい顔で書類を見ている西園寺――
額の脂汗を吹きながら立ったまま様子をうかがっている篠宮と、毅然とした姿で立っている藤倉。
西園寺「これは、どういうことですか」
篠宮「それは……」
西園寺「全クラス、中間試験より平均点が下

がってますね」

篠宮・藤倉「申し訳ございません」

西園寺「社会科を専門とする私としては、特に三年生の社会科の成績が悪いことは、誠にもって遺憾です」

篠宮「はぁ……」

西園寺「（篠宮に）教頭先生、昨年度から導入したという追試制度ですが、かえって間違えたところだけをもう一回勉強すれば良いという甘い考えを生徒たちに持たせるようになってしまっているのではありませんか？」

藤倉「確かに、その可能性はないとは言い切れませんね」

篠宮「藤倉先生……」

西園寺「部活や生徒会など、授業後の活動時間を短縮させましょう」

藤倉「名案かと思います」

篠宮「しかし……」

西園寺「生徒たちがすべきことは、勉学に励

むことです。部活や生徒会を頑張りたい気持ちは分かりますが、そのようなことに現を抜かして成績が悪くなっては、元も子もありません。二学期の中間試験が終わるまで、部活及び生徒会の活動時間を一時間短縮し、下校時間を早めます」

篠宮「（大きい声で）そんなにですか……？」

西園寺「当然です。良いですね？」

藤倉「はいッ……」

篠宮「……」

藤倉「教頭先生？」

西園寺「学校の印象は、先生方の実績にも影響します。当然、教頭先生も藤倉先生も、状況によっては異動や昇任に影響が出るやもしれませんよ」

苦虫を噛み潰したような顔の篠宮。

○同・校門前

一台の黒いセダンが入ってくる。

○同・生徒会室

拓真、しおり、香澄、高林が、それぞれ仕事をしている――内線の電話が鳴る。

高林「（電話に出る）はい、生徒会室です」

篠宮の声が大きく、受話器越しから漏れている。

篠宮の声「高林先生、至急校長室までお願いします」

高林「（受話器を耳から少し離して）分かりました。あの、教頭先生、電話なのでそんなに大きい声出さなくても大丈夫です。すぐ向かいます（と受話器を切る）」

香澄「校長室に呼び出しって、何でしょうね？」

高林「何だろう。それにしても、本当教頭先生の声大きい。鼓膜破れるかと思った」

拓真「演劇部の顧問ですもんね、教頭先生。指導してる声も大きいから、たまに体育館から声聞こえてきますもん」

高林「至急来てくれって言われたから、とり
あえず行ってくるわ（と出ていく）」
拓真・しおり・香澄「いってらっしゃい」
拓真「校長室かぁ……（と立ち上がろうとす
る）」
香澄「やめときなさい」
拓真「何で？」
香澄「知らないよ、また面倒な事になっても」
拓真「梢先生が呼ばれるってことは、生徒会
に関することかもしれないじゃないか」
しおり「まあ、その可能性もあるよね」
拓真「それに、ダムスの予言のことも気にな
る」
しおり「もしかして、邪魔が入ることって、
校長先生……？」
拓真「無きにしも非ず」

○同・校長室
来客用ソファーに座っている西園寺、
篠宮、高林。

真ん中のテーブル、西園寺の前に置いてある名刺『音楽プロデューサー　木崎徹』。

その名刺を見ている西園寺。

西園寺「音楽プロデューサーともあろうお方が、一体どのようなご用件で」

向かいの席に座っている音楽プロデューサー・木崎徹（６２）と、２年２組生徒・花井花凛（１７）。

木崎「では、単刀直入に申し上げましょう。私がプロデュースをしている三人組のアイドルユニットグループ『Jump Evolution』のセンターは、ご存じこの花井花凛です」

西園寺「ご存じと言われても、私はそのグループは全く存じ上げません」

篠宮「（西園寺に小声で）結構有名ですよ」

西園寺「知らないものは知りません」

木崎「（苦笑して）そうですか。彼女は、こちらの高校に通っている二年生ですが、実はこれからグループのプロモーションを本

格的に進めるにあたって、芸能活動を優先させようと思ってます。それにはまず、学校の理解と協力が必要と思い、今日はプロデューサーの私が自らご挨拶をと思いまして。どうぞ、よろしくお願いいたします」

花凛「校長先生、お願いします」

西園寺「そう言われましてもねぇ」

高林「（花凛に）生徒会はどうするの？　今、書記として活動してもらってるけど、学校に来れなくなったら、その活動だってできなくなるんだよ」

花凛「分かってます……」

高林「生徒会役員は選挙で決まってるの。今ここで、芸能活動を優先したら、投票してくれた生徒たちにも申し訳ないし、それにこれから文化祭の準備だって始まる。生徒会メンバーにも迷惑かけることになるのよ」

花凛「それでも私は、このアイドル活動に命かけてるんです。無茶を言ってることは分かってますが、お願いします」

篠宮「一生懸命に頑張りたいっていう君の思いには賛同したいんだけどね……」
西園寺「教頭先生、そんな甘いこと言ってる時じゃありませんよ。何より、生徒たちがすべきことは勉学に励むこと。部活と生徒会の活動時間だって一時間短縮することが決まったばかりじゃありませんか。それでもまだ、この子の芸能活動を許すと申されるのですか？」
篠宮「はぁ……」
高林「一時間短縮って何の話ですか？」
篠宮「ついさっき決まって、この後先生方に共有する予定です」
高林「（西園寺に）校長先生、何もそこまで……」
木崎「随分と、教育熱心な校長先生なんですね」
西園寺「別に、教育熱心という自覚はありません」
木崎「そうですか」

西園寺、ドアのほうを訝しそうに見ると立ち上がり、

西園寺「ちょっと失礼します」

西園寺がドアを開ける。廊下で拓真としおりがしゃがんで話を聞いており、拓真としおりの横顔にドアが当たる。

拓真「いってッ……」

しおり「いたッ……」

拓真としおり、凍り付いたように唖然とし、西園寺を見る。

西園寺「（上から見下ろすように）何してるの」

篠宮「（立ち上がり大きい声で）盗み聞きしてたのか、君たち！」

高林「（耳をふさいで）うるさ……」

拓真「梢先生が校長室に呼ばれたんで、気になっちゃって」

西園寺「だからって、盗み聞きは感心しませんね」

拓真「話は聞いてました。花凛ちゃんの件、

僕は賛成です」
高林「沢村君……」
西園寺「勝手にそんなこと。生徒会長の一存で決めれることじゃないでしょ」
拓真「それに、勉学に励むことは大事ですけど、だからって部活や生徒会の時間までつぶすことないじゃありませんか。そんなことしたら、グレて問題児が増えたり、早く下校したらその分遊ぶ時間が増えて、かえって勉強しなくなるんじゃありませんか」
しおり「そうだそうだ」
西園寺「何てことを……」
拓真「教頭先生だって、演劇部の夏の大会が近い今、一番力を入れて稽古したいと思ってますよね」
篠宮「え……まあ、正直言えば……」
拓真「部活や生徒会っていうのは、勉強と同じぐらい、いや中にはそれ以上に没頭できる大事な時間なんです。花凛ちゃんにとっては、芸能活動がそれと同じぐらい大事な

んです。どうして校長先生は、そういう僕ら生徒たちの気持ちが分からないんですか。それでも教育委員会から異動してきた校長先生ですか？」

花凛「先輩……」

西園寺「言いたいことは、それだけですか？」

拓真「え……？」

西園寺「そんな戯言で、私の心が動くとでも思った？」

拓真「（動揺して）いや……それは……」

西園寺「そういうのをね、御託を並べるって言うの。綺麗事だけじゃあ、世の中は上手くいかないの」

拓真、目に涙をためて耐えている。

西園寺「特に私は、あなたみたいに、何とかなるの精神で根性論だけで生きていこうとする人間が、大っ嫌いなのッ」

こらえきれず、しゃがみ込んで泣いてしまう拓真。

木崎「（引いて）いや……校長先生、いくら

何でも言いすぎなんじゃないですか？　ちょっと可哀想に見えてきた」
高林「そうですよ。もう少しオブラートに包んだ方が良かったんじゃないですか？」
西園寺「こういう子にはね、ストレートに言わないと伝わらないの」
拓真「（涙を拭きながら）校長先生は、花凛ちゃんの想いも、僕がどんな想いで生徒会をやってるかも、全然分かってないんです。何で花凛ちゃんや僕の情熱が伝わらないんですか。そちの目は節穴か！　この情熱が目に入らぬか！　図が高い！　控えよろう！」
　西園寺、今にもキレそうな顔。
しおり「拓真、行こッ」
拓真「血も涙もありゃしねえじゃねえか！　鬼でも蛇でもないじゃなくて、鬼でもあり蛇なんだよ」
しおり「どうも、お騒がせしました」
　拓真を無理やり連れ出すしおり。

拓真の声「神も仏もありゃしねえじゃねえか！」

呆然としている一同。

○同・保健室

拓真が顔を伏せて泣いている――付き添っているしおりと畑山。

しおり「よく頑張ったよ、拓真は。校長先生にはっきりちゃんと自分の考え言えたんだから」

拓真「けど、あのクソババア……いや、あの鬼ババア、何も分かってくれなかった。許せない！　あいついつかぶっ殺してやる！」

と、また突っ伏して赤ん坊のように泣く。

しおり「今日は重症だわ。こんなに泣いている拓真、初めて見たわ」

畑山「いつまで泣いてるの？」

泣き続けている拓真。

しおり「これはしばらく止まらないですね」

拓真「（顔を上げて）先生、涙止める薬ありますか？」
しおり「あるわけないでしょ、そんなもの」
畑山「あるよ」
しおり「え？」
畑山、両手を拓真の顔に添えると、両親指で拓真の涙を拭うと、
畑山「（上目遣いになり）男の子は、泣・か・な・い・の」
スッと涙が止まる拓真。
拓真「あ、止まった」
しおり「うそ！？」

○同・職員室
険しい顔で入ってくる高林――それぞれ仕事をしている水谷、竹平、布施、陣内、森。
水谷「あ、高林先生。聞きましたよ。沢村君、校長先生とバトルしたらしいじゃないですか」

高林「そうなんですよ。結局校長に負けちゃいましたけど」
竹平「まあ、あの校長に敵うわけがありませんよね」
森「それに、二年生の花井さんの件でも呼ばれたんでしょ。担任が出張で不在だから、代わりに生徒会担当として」
高林「その件は別に良いんですよ。何とか校長が折れて、芸能活動を優先することになったので」
森「良かったじゃないですか」
高林「でも心配なのは、沢村君のほうですよ」
布施「大丈夫ですよ、彼なら」
高林「どうしてそんなこと言えるんですか？」
布施「去年から担任してるから分かるんです。沢村はちょっとやそっとのことじゃへこたれるような子じゃありません」
高林「私だって、彼の性格はよく分かってます。でも、あの子があんな大号泣したの、初めて見たんですよ」

陣内「確かに珍しいですね。彼はいつも元気なイメージがありますから」
高林「だから余計に心配なんですよね」
水谷「布施先生、気にかけてあげてくださいね。いくら普段元気でも、あれぐらいの年頃の子は精神面で不安定になる時がありますから」
布施「分かりました」
高林「そういえば三年生の先生方、文化祭のクラスの出し物は決まりました？」
竹平「うちは決まりました。一組はメイド喫茶です」
布施「二組は、おふくろの味です」
高林「何ですか、それ？」
布施「おふくろの味をテーマに、肉じゃがとコロッケをやるそうです」
高林「なるほど」
陣内「三組は中庭で屋台やります。焼きそばとフランクフルトの販売です」
水谷「ＰＴＡと教員有志は、カレーライス販

売です」
高林「分かりました。準備のほうでも、ぜひ生徒たちのフォローをお願いできればと思います。よろしくお願いします」
一同「はいッ」

○沢村家・ベランダ（夜）
拓真が電話で話している。
拓真「そう。でも良かった、あの校長が何とか折れてくれたんだったら。てこでも動かないような人だからね」

○レッスンスタジオ・廊下（夜）
花凛が電話で話している。
花凛「いえ……。でも先輩のおかげです。私、これからアイドル活動、頑張ります」

○沢村家・ベランダ（夜）
拓真「押しも押されぬ、センターだもんね。頑張ってよ、応援してるから。生徒会のこ

とも文化祭のことも、今は一旦忘れて、アイドル活動だけのことを考えな。これはチャンスなんだから。木崎プロデューサーにもよろしくね。じゃあ（と電話を切る）」

と、しおりの声がする。

しおりの声「何だ、元気そうじゃん」

拓真、振り向く――時田家のベランダに立っているしおり。

拓真「……」

×　×　×

各家のベランダで話す拓真としおり。

拓真「まさか、部活も生徒会活動も、時間短縮されるなんてねぇ」

しおり「ダムスの言ってた邪魔って、この事だったのか……」

拓真「なるほど」

しおり「でも、どうせ家で残業するんでしょ？」

拓真「当たり前だろ。あんなババアの改革に惑わされてたまるかってんだよ」

しおり「本当に嫌いなんだね、校長先生のことが」
拓真「大大大っ嫌い！　向こうだって、俺みたいな生徒が嫌いだって言ってたじゃん」
しおり「言ってたね」
拓真「何でこんなに物事上手くいかないんだろ。脱線ばっかりしてるわ……」
しおり「大丈夫だよ。トーマスだってエドワードだって脱線ばかりしてるんだから」
拓真「エドワードはそんなに脱線しない」
しおり「え、そうなの？」
拓真「あれは後押しがメインだから。むしろ脱線してるのは、パーシーかジェームス」
しおり「知らんけど」
拓真「軌道修正かけないとね。こんなんでへこたれる俺じゃねえぞ、バカヤロウ」

○青竹高校・全景

○同・体育館

終業式が行われており、全校生徒が集まっている――舞台上の演台で話している西園寺。
直立のまま話を聞いている各クラスの生徒たち――拓真、寒気がするようにずっと腕をさすってる。隣で立っているしおり。それへ、
しおり「（小声で）どうしたの？」
拓真「何か、あの校長の声聞くだけで、背筋が凍るというか、寒気がするというか……」
しおり「完璧トラウマになってんじゃん」
西園寺「では皆さん、有意義な夏休みを過ごしてください（と降壇する）」
司会席にいる篠宮。
篠宮「それでは、文化祭実行委員会からの連絡です。お願いします」
拓真「（しおりに）よし、行くぞ」
しおり「うんッ……」
×　×　×
壇上で話している拓真としおり。

しおり「九月末に行われる文化祭では、ステージ企画を行います。そこで現在、有志発表を絶賛募集しています。クラスで配られている学校新聞に募集の詳細が載っていますので、皆さんのエントリーをお待ちしています。ミスコンのエントリーも募集してます。自薦他薦問わずなので、こちらも皆さんからのエントリーシートをお待ちしております」

拓真「（深呼吸をすると）文化祭は、三年間のうちに三回あります。けど、よく考えてみてください。一年生の文化祭は一回しかありません。二年生も三年生も、当然一回しかありません。後にも先にも、同じ文化祭を次の年に再現するのは不可能なんです。一度しかないこの文化祭を、ぜひ一緒に盛り上げていきましょう。皆さん、ご協力お願いいたしますッ」

と、頭を下げる拓真としおり――芳樹が最初に拍手をし、釣られるように愛

永、亮太、聡子、香澄、生徒たちが拍手していく。篠宮、藤倉、高林、水谷、竹平、陣内、布施、森、畑山、柳本、松坂、教師たちも拍手をしていく。

篠宮「ブラァーボー！」

不服そうに篠宮を見る西園寺――思わず目をそらす篠宮。

晴れ晴れしい顔の拓真としおり。

○同・新聞部室

拓真が入ってくる――英哉が迎える。

拓真「どうしたの？　大川君からお呼び出しとは、また珍しい」

英哉、プリントの束を無言で渡す。

拓真「（書類を見て）これ、ミスコンのエントリー？」

英哉「有志発表の募集、生徒会の負担にならないようにと思って、窓口を新聞部にしたんです。それが、今日現在集まった分です」

拓真「ありがとう。結構来たね」

英哉「みんな、今日の挨拶に心打たれたんじゃないんですか？」
拓真「え……？」
英哉「普段、新聞部で言葉を使ってる僕も、正直、悔しいですが、少なからず心打たれました」
拓真「大川君……」
英哉「ノリと勢いだけの子かと思ってましたけど、ちゃんと考えてるんですね」
拓真「（英哉に抱き着き）ありがとう！　大川君！　何、そんな良いこと言ってくれるんだ。感情のないカタブツだと思ってたけど、ちゃんと心動くんじゃん。それに、その大川君の心を動かした俺って、天才か？」
英哉「何もそこまで言ってません」
拓真「照れんなって。でも、ありがとう。自信に繋がった！　これからも、シクヨロです！」
と、嬉しそうに飛び出していく――呆れながらも少し笑みを浮かべる英哉。

○同・生徒会室

しおりと愛永が、折り紙を折っている。

しおり「ありがとう、愛永」

愛永「何が？」

しおり「文化祭のミスコンと有志企画のエントリー募集、配信で声かけてくれたじゃん」

愛永「え、見てたの？」

○時田家・しおりの部屋（回想）

スマホを見ているしおり――映像配信をしている愛永が映っている。

×　×　×

インサート・スマホの画面。

愛永「青竹高校のみなさ～ん。文化祭を一緒に楽しみたい方、もしくは文化祭を盛り上げたいと思ってる方、ミスコン企画と有志発表の出場者を募集します。ちなみに私も出ちゃいます。アイドルステージやろうかと思ってます。みんなの募集お待ちしてま

～す。（と手を振り投げキッスをして）キャハッ」

○青竹高校・生徒会室（回想戻り）

しおり「本当に口でキャハッっていう人いるんだと思って、びっくりしたけど」

愛永「私は、拓真君の考えと一緒。一回だけの文化祭を私自身も楽しみたいの」

しおり「（微笑んで）そっか」

愛永「けど、一個気になることがあってさ」

しおり「何？」

愛永「拓真君と香澄ちゃんってさ、何であんなにいつもバチバチしてるの？」

しおり「あれ、愛永知らないんだ」

愛永「何かあったの？」

○同・廊下（回想）

掲示板の前に集まっている生徒たち。

しおりの声「去年の後期生徒会選挙で、拓真と香澄ちゃんは、副会長に立候補したの。

言わば、二人は競争相手だったわけ」
愛永の声「なるほど」
香澄がやってくる――掲示板に張り付けられている選挙の投票結果を見る。
しおりの声「で、その結果がね……」
掲示板の張り紙の中に記載されている『生徒会副会長立候補者　沢村拓真３５５票　渡部香澄３４９票』の文字。
香澄「そんな……」

○同・生徒会室（回想戻り）
愛永「え、わずか六票差？」
しおり「そう」
愛永「一票の重みを感じる、僅差ってやつか」
しおり「そけどねここが拓真の悪いところなんだけど、あいつ前に言ってたんだよ」
×　×　×
〈フラッシュ〉
沢村家のベランダでの拓真。
拓真「投票したのは俺じゃねえのに、俺を恨

むのはお門違いってもんだろ。済んだことを引きずってもしょうがねえのにな。根に持つタイプの女は嫌われるぞ」

×　×　×

しおり「そんなこと、本人の前で言っちゃ絶対ダメだって、私ちゃんと忠告したんだけどね」

と、香澄の声がする。

香澄の声「別に引きずってないし」

しおりと愛永、ハッと振り向く――いつの間にか香澄が立っている。

しおり・愛永「（お互い抱き着いて）ギャーーーーーー！」

香澄、毅然とした状態で部屋に入ってくると、

香澄「みんな勘違いしてる。私は別に、拓真に選挙で負けたことなんて、少しも根に持ってないから」

しおり「けど、選挙で競争したことが、対立のきっかけなんじゃないの？」

香澄「だから違うって」
愛永「じゃあ、どうして？」
香澄「あれはね、一年生の夏だった……」

○同・購買〜廊下（回想）
生徒たちが昼食を買っている――階段を途中まで下りてくる香澄。購買の棚に並べられている、残り一つのベルギーワッフルに視線を送る。
香澄「やった、最後の一つ」
と、廊下を拓真が通りかかる。
拓真「お、ベルギーワッフルラスト一個じゃん」
香澄「（愕然と）……」
拓真、ベルギーワッフルを購入すると、その場を去っていく――香澄がやってくると、拓真の後ろ姿を呆然と見る。
拓真「（食べ歩きをして）うまッ……」
香澄、怒りがこみ上げて、拳を握る。
香澄の声「今でも、あのベルギーワッフルの

恨みは忘れてない……」

○同・生徒会室（回想戻り）

困惑顔のしおりと愛永――と、いつの間にか拓真が立っている。

拓真「そんな理由だったのか……」

しおり「拓真ッ……」

香澄「何だ、いたんだ」

拓真「ずっと俺を毛嫌いしてたのって、選挙に負けたことじゃなくて、ベルギーワッフルを買われたことだったのか？」

香澄「だから、そうだって言ってるでしょ」

拓真「たかがベルギーワッフルで、俺のこと恨むなんて」

香澄「たかが？」

愛永「あ、ヤバい空気になった」

しおり「地雷踏んじゃったよ、こいつ」

香澄「あのね、食べ物の恨みって恐ろしいんだよ。しかもあの時、私はテスト勉強でお腹が空いてて、糖分接種しようと思って、

大好きなベルギーワッフルを買おうとしてたの。それなのに……」
拓真「お腹空いてたから、イライラしてたんじゃないのか。ベルギーワッフル買われたぐらいで、そんな大げさな」
しおり「ねえ拓真。その最後の一個を買っちゃったっていう出来事は、さすがに覚えてるよね？」
拓真「（少し考えるが）全然覚えてない」
しおり「ダメだこりゃ」
拓真「じゃあ俺はどうしたら許してくれるの。ベルギーワッフル買ってきたら良いの？一個？　二個？　何個買ってきたら良い？」
しおり「いや、そういうことじゃなくて……」
香澄「二個ッ……」
しおり「え？」
香澄「二個買ってきたら許してあげる」
愛永「そんな理由で許してくれるんだ」
拓真「分かったよ、じゃあ買ってくるよ。買ってこれば良いんだろ」

と、持ってきた書類の束を香澄に渡すと、財布を持って再び出ていく。

香澄「（書類を見て）え、これ全部、ミスコンと有志発表のエントリー？」

しおり「すごッ……さすが愛永の影響力」

愛永「よし、夏休みで思い切り練習するぞ」

○ファミレス（夜）

拓真、聡子、亮太がご飯を食べながら話している。

聡子「じゃあ、許してくれたんだ、香澄ちゃん」

拓真「うん。購買部で五個ベルギーワッフル余ってたから、全部買い占めてきた」

亮太「それで全部丸く収まったんだ」

×　×　×

〈フラッシュ〉

青竹高校の生徒会室で、美味しそうにベルギーワッフルを美味しそうに頬張っている香澄。

×　　×　　×

拓真「まあ、それで解決できたのなら、安いものだよ」

亮太「そっか」

拓真「二人は相変わらず順調そうで。けど、今のところバレてないよね。本当に気をつけなよ。学校で二人で戯れるのは良いけど、いつどこで誰が見てるか分からないんだから」

亮太「いや、別に戯れてなんか」

聡子「そうだよ」

拓真「（目を細めて）ほー」

亮太「（慌てて）ホントだって」

拓真「（目を開いて）ジロリッ」

聡子「そういえば、今日芳樹君は一緒じゃないんだ」

亮太「そうなんだよ。夏休みの追試の勉強するからって、先に帰った」

拓真「このタイミングで追試を挟むなんて、文化祭の準備に横槍入れてるんだよ、学校

が」

亮太「ポテト、もう一回注文しよっ」

拓真「じゃあそれ食べたら、帰ろうか」

○時田家・しおりの部屋～ベランダ（夜）

勉強をしているしおりと芳樹。

芳樹「ああ、誰だよ。夏休み中に追試なんて考えたの」

しおり「去年もそうだったでしょ」

芳樹「文化祭の準備の真っ只中に追試挟み込むなんて、とんだ嫌がらせだな」

しおり「ねえ、追試用のテスト勉強、一旦休憩しない？」

芳樹「ここの区切り良いとこが終わったらな」

しおり「今、何の勉強中？」

芳樹「保健体育」

しおり「じゃあ……（と芳樹を後ろから抱きしめて）座学の保健体育じゃなくて、技能の保健体育の勉強しようか？」

芳樹「え……良いんですか」

しおり「（囁くように）良いよ」
と、ベランダから何本も鉛筆が落ちる音。しおりと芳樹が振り向くと、ベランダで唖然と立ち尽くしている拓真。
拓真「ギャアーーーーーーー！」
しおり「拓真ッ……」
しおり、ベランダの鍵をあける――勢いよく入ってくる拓真。
拓真「おい。何だか最近二人の様子がどうもおかしいと思ったら、この始末じゃねえか。お前たちもコソコソコソコソ戯れやがって」
しおり「私たち付き合ってるの。付き合ってるってことは、何しても良いってことでしょ」
拓真「めちゃくちゃな言い分だぞ、今のお前の発言。何リア充アピールしてるんだよ。リア充爆発しろ、頭カチ割るぞ、いい加減にしろこの野郎」
しおり「そこまで言わなくてもじゃない」
芳樹「まあまあ拓真。少しは落ち着けよ」

拓真「黙ってろ腐れ外道が。これが落ち着いてられるか！」
芳樹「しおりを責めないでくれ。俺が一目ぼれして、一方的に好きになったんだから」
拓真「一目ぼれ？　こんな盛りのついたアルパカみたいな奴のどこが？」
しおり「あ、また言った」
芳樹「リップクリーム塗る仕草がエロくて」
拓真「はあ？　その発言は誠にもって遺憾だぞ。（と芳樹に掴みかかり）日本の政治家だって、この状況でそんなこと聞いたら遺憾って言うわ」
しおり「（拓真に）とにかく帰ってよ」
拓真「鉛筆削り借りに来たんだよ」
しおり、机の上に置いてある鉛筆削りを投げつける。
しおり「はい、もう良いでしょ。ここからは、ＰＧ―１２、いや、Ｒ―１５だから」
拓真「よく言うわ。どうせお前らのことだ。Ｒ―１８になるに決まってんだろッ」

しおり「まあ、その可能性は高いね」
拓真「間違いなく１００パーセントだろ……。
天国のお父さん、化けて出てきても知らねえぞ。あの世から、覗き込んで、嘆いて、崇られても知らねえぞ」
しおり「大丈夫。見られないように、布団の中でするから」
拓真「そういうこと言ってるんじゃねえよ。
（と芳樹を指さして）お前、頭坊主にしてＹｏｕＴｕｂｅで謝罪しろよ。それぐらいの重罪人だぞ、お前はッ……」
芳樹「えぇ……」
しおり「もうとにかく帰って、ホラホラ」
と、拓真を無理やりベランダに追い出すと、鍵を閉める。
拓真「おい！　こら、しおり。お前、ちゃんと……」
と、カーテンを閉めて、拓真の言葉を遮るしおり。
しおり「ふー、やれやれ」

芳樹「大丈夫か？」
しおり「うん、大丈夫。ほっとけば帰るから」
芳樹「そっか……」
しおり「続き、しよっか？」
心臓がバクバク鳴る芳樹。
×　×　×
放り出された拓真、放心状態のような顔で、散らばった鉛筆を拾っている。

○青竹高校・全景

○同・生徒会室
飾り付けの作業をしているしおり、愛永、香澄。
愛永「ねえ、拓真君と芳樹君は？」
しおり「拓真は体調不良、芳樹は家族旅行で沖縄行ってる」
愛永「体調不良って珍しいね。何かあったのかな？」
しおり「え……さぁ」

香澄「良いなぁ、沖縄」
しおり「夏の沖縄って、絶対良いよね」
と、『一週間の歌』の合唱が聞こえてくる。
愛永「ん？　何か歌ってる？」
香澄「ああ、音楽室だよ。三年生の先生が、有志で合唱やるって。教頭先生が指導してるところ」
愛永「へえ。（と窓を開けて、上を見上げて）先生たちが合唱か」

○同・音楽室
ピアノを弾いている水谷。楽譜を見ながら『一週間の歌』歌っている竹平、布施、陣内、森――様子を見ている篠宮、歌の途中で止めて、
篠宮「（演劇っぽく力が入り）はい、ストップストップ。皆さん、全然声が出てない。そんなんじゃ、生徒たちに想いなんて届きません。もっと歌詞を読み取って、感情を

入れてください」
陣内「けど、これロシア語ですよね」
布施「やっぱり俺たちにはハードル高くないですか」
森「誰ですか、これ選曲したの」
水谷「私です」
竹平「これ完璧にしようと思うと、なかなか難しいですよ」
布施「ですよね。あ、教頭先生。一回お手本見せてくださいよ」
篠宮「え、私が？」
竹平「そうですよ。やっぱりお手本があったほうが」
篠宮「……では、僭越ながら私が。水谷先生、よろしければ一緒にご唱和を」
水谷「はい」
篠宮「３、ハイ」
水谷がピアノ伴奏を始める――ミュージカルのごとく大熱唱をする篠宮と、それに合わせて歌う水谷。

○同・校長室

書類に判子を押している西園寺。篠宮と水谷の歌声が漏れてくる。

西園寺、上を見上げて不服そうな顔。

○同・音楽室

唖然としている一同――気にも留めず大熱唱する篠宮と水谷。

篠宮、気持ちよく歌い終わると、

篠宮「さあ、先生方もご一緒に」

一同「無理ッ！」

○同・生徒会室

しおり、愛永、香澄、高林が話している。

香澄「え、じゃあ先生方の有志発表は内容変えるんですか？」

高林「バンド演奏やるって。大吾先生が言ってた」

しおり「さすがに、合唱はハードル高いでしょ。しかも一週間の歌を原曲のロシア語バージョンなんて」

愛永「まあ、一番気持ちよく歌ってたのは、教頭先生だったけどね」

○同・廊下

英哉が歩いている――掲示板の前に立ち止まる。

掲示されているチラシ『ミスコンＤＫ＆ＪＫ　エントリー絶賛募集中』

チラシをじっと見ている英哉――その場を去っていく。

○公園（数日後）

音楽に合わせて歌とダンスの練習をしているしおり、愛永、聡子――センターで踊るしおり。そのすぐ後ろに横並びする愛永と聡子。

○ハンバーガー店

拓真、芳樹、亮太がポテトを食べながら話している。

亮太「何かさ、準備でいろいろ動いてると、あっという間に夏休みも終わりそうだな」

拓真「だよね」

芳樹「拓真も、よくやるよ。生徒会長もやって、結局有志発表も俺たち三人で出ることになってさ」

拓真「だって、最後の文化祭だもん。どうせやるんだったら、全部楽しみたいだろ。欲張りって言われるぐらいがちょうど良いんだよ。二人だってさ、ミスコン出れば良かったんだよ。それなりに顔形整ってるわけだし」

亮太「いやいや、俺は良いわ」

芳樹「俺も。ミスコン出て女の子にモテちゃったら大変だからな」

拓真「よく言うわ……。夏休みももうすぐ終わるけど、二人ともお相手とは順調？」

亮太「もちろん。まあ、芳樹がしおりと付き合ってるって聞いた時は驚いたけどな」
拓真「本当だよ」
芳樹「凄い剣幕だったんだよ、こいつ」
拓真「当たり前だろ。まさか芳樹としおりが……。それに、ちょくちょくしおりの家に遊びに行ってるみたいだしね。隣だからすぐ分かる」
亮太「そんなに行ってるのか？」
芳樹「いや、そんなたくさんじゃないよ」
拓真「誤魔化しは聞かないよ。けど、本当に好きなんだな、しおりのこと」
芳樹「（デレデレして）まあね」
拓真「（笑顔のまま）気持ち悪いな」
芳樹「（拓真のでこを叩き）うるさいな」
拓真「（林家三平風に）痛い、もう痛いっすから」
亮太「（芳樹に）あ、ねえ沖縄の土産は？」
芳樹「新学期に渡す」
亮太「はいはい。（と立ち上がると）ポテト

追加で買ってこよう」
拓真「ホント、ポテト好きだな」

○青竹高校・全景

○同・3年1組教室
教卓で話している竹平。
竹平「はい。夏休みの課題、集めます」
と、しおり、愛永、聡子、生徒たちが
次々に席を立ち、プリントの束を提出
していく。

○同・3年2組教室
朝の挨拶をしている一同。教卓に立つ
布施、各席で起立している拓真、芳樹、
亮太。
生徒たち「おはようございます」
布施「（一同より大きい声で）おはようござ
いますッ！」

○同・3年3組教室

英哉、香澄、その他生徒たちが座っている――プリントを配っている陣内。

陣内「はい、配布物配ります」

○同・職員室

水谷と森が仕事をしている。

森「二学期始まっちゃいましたね。そうしていくうちに、あっという間に三学期になるんでしょうね」

水谷「三年生の一年間は特に早く感じますからね。今月末には文化祭もありますし、頑張りましょ」

森「はいッ」

○同・和室

文化祭の看板装飾をしているしおり、愛永、聡子――芳樹が入ってくると、土産のお菓子を渡す。

芳樹「はい、沖縄土産」

一同「ありがとう」

○同・生徒会室

芳樹が、チョコレート菓子『黒い愛人』の箱を広げて、拓真、香澄、亮太に渡している。

芳樹「はい。沖縄名物の『黒い愛人』です」

拓真「何その、昼ドラみたいな名前のお菓子」

亮太「沖縄名物なんて聞いたことないわ」

芳樹「でも美味いから食ってみて」

香澄「よし、いただきます」

拓真・亮太「いただきます」

と、それぞれ菓子を食べる。

香澄「美味しい」

拓真「ああ、美味いわ」

芳樹「だろ」

亮太「（食べながら）あれ……これって、お酒入ってる？」

芳樹「ああ入ってるよ。ラム酒入り」

亮太「（怪訝な顔で）これって、聡子にも渡

した？」
芳樹「ああ、渡したよ」
亮太「まずい……」
芳樹「え？」
と、愛永が走ってやってくる。
愛永「大変ッ。聡子が」
亮太「やっぱり……」

○同・保健室
ベッドで休んでいる聡子――様子を見ている亮太、芳樹、畑山。
畑山「アルコールが消化されれば、大丈夫よ」
亮太「それは良かった」
芳樹「どういうこと？」
亮太「聡子、体質的にお酒が入ったチョコレートが食べれないんだよ」
芳樹「そうだったのか……ごめん」
亮太「いや、気にするな」
畑山「まあ、そういう子いるからね」
と、水谷が入ってくる。

水谷「失礼します。（と畑山に）美鈴先生、ちょっとよろしいですか？　熱中症の生徒が」

畑山「分かりました。（と芳樹たちに）ごめん、ちょっと出てくる」

と、水谷と共に出ていく。

芳樹「じゃあ、俺文化祭準備に戻るわ。亮太は聡子と一緒に」

亮太「ああ、ありがとう」

芳樹「じゃ（と、カーテンを閉めて出ていく）」

聡子、ゆっくりと目を開ける。

亮太「気が付いた？」

聡子「亮太……」

亮太「芳樹のお土産のチョコレートに、酒が入ってたんだって」

聡子「そうだったんだ」

亮太「アルコールが消化されれば大丈夫だって、美鈴ちゃんが」

聡子「そう……」

亮太「良かった、安心した」
聡子「亮太……」
と、起き上がると、亮太と抱き合う―
―その瞬間、カーテンが開く。ハッとなる聡子と亮太。

○同・新聞部室
英哉、森たちが各自作業をしている―
―陣内が来ており、付箋のメモを英哉に渡す。
陣内「野球部が地区予選で決勝まで行ったんだ。新聞でぜひ掲載をしてほしいんだ」
英哉「はぁ……」
陣内「頼むよ、大川。野球部が決勝まで行ったことは、学校においても名誉なことなんだ。顧問としても誇らしい出来事を、ちゃんと載せてあげたいんだ」
英哉「けど、締め切りが近いんですよね……」
陣内「まあ、そう言わずに。担任の願い、受け入れてくれないかな？」

森「大川君。陣内先生が、そこまでおっしゃってるんだし」
英哉「（渋々）分かりました」
陣内「本当かッ」
英哉「その代わり、原稿執筆にあたり必要な参考資料と写真データを明日までに提出してください。そうしないと入稿間に合わないので」
陣内「分かった」
森「（陣内に）詰め詰めのスケジュールで申し訳ありませんが、こっちも都合があるのでお願いします」
陣内「ＯＫですッ。機転が利くな、さすが大川だ」
英哉「（作業をしたまま）……」
陣内「じゃ、よろしく」
と、ドアを開けて出ていこうとすると、走っている拓真が血相を変えて、通り過ぎる。
陣内「ああ！　びっくりした！　（と拓真の

後ろ姿に向かって）こら！　危ないじゃないか、廊下走るんじゃない！」

答えず走り去っていく拓真――怪訝にその様子を見ている英哉。

英哉「（呟いて）何かあったのかな……」

○同・廊下～階段

走っている拓真――階段をかけ降りてくると、更に廊下を走っていく。

○同・生徒指導室

息を切らして拓真が、ドアを開けて勢いよく入ってくる。

拓真「失礼しますッ……」

聡子、亮太、柳本、布施、高林が、一斉に拓真に振り向く。

拓真「……」

柳本「（聡子と亮太に）話は以上だ」

聡子と亮太、険しい顔でそのまま出ていく――慌てふためく拓真。

拓真「柳本先生、二人は……」
柳本「一ヶ月半の謹慎だ」
拓真「え……」
布施「部活動規約に違反したからな」
拓真「部活内での恋愛は禁止なんですよね」
布施「分かってるじゃないか」
拓真「……」
高林「まさか沢村君。二人のこと、知ってたの？　それで部活動規約のことを……」
拓真「はい……」
高林「そう……」
拓真「何とかならないんですか？」
柳本「謹慎は決まったことだ。俺はただ、その規約に従って処分を下した。それだけだ」
拓真「大吾先生は、これで良いんですか？　あんな、いつから続いてるのか分からない規約に違反しただけで……」
布施「規約は規約だ。今更変えられないだろ」
拓真「そんな……」

○同・３年２組教室（夕）

拓真、しおり、芳樹、愛永、香澄が話している。

しおり「一ヶ月半の謹慎？　二人とも？」

拓真「ああ。サッカー部の部活動規約で、部活内での恋愛禁止っていうルールがあって」

芳樹「けどさ、一ヶ月半の謹慎だったら、二人とも文化祭出れないじゃん」

拓真「そうなんだよ。それが一番の問題なんだよ。二人とも実行委員だし、聡子はしおりたちと有志発表でアイドルステージやるし、亮太だって俺と芳樹と一緒に三人でステージ出る予定だからさ」

愛永「どうしよう……」

香澄「ねえ、何とかならないの？」

拓真「それを考えてるんだよ。普通にこのまま謹慎受け入れたら、最後の文化祭に参加できないんだ。何とかあの二人が文化祭に参加できる方法はないかな……」

しおり「ダムスの言ってた、邪魔が入るって、

もう一つはこの事だったのかも」
芳樹「ダムス、そんなこと言ってたのか？」
しおり「うん……。本当、どうしてこんなに上手くいかないんだろ。やっぱりこれが現実なんだね。イケメンや美女の転校生なんて来ないし、屋上には入れないし、教師と生徒の連携プレイなんてないし、生徒会なんて何の権力もないしね」
拓真「お前、日本の学園ドラマディスってるのかッ？」
しおり「だって現に、うちの学校はそうでしょ？」
拓真「まあ、生徒会に権力がないのは、悔しいけど事実だわ……」
と、英哉が入ってくる。
英哉「随分深刻そうですね」
一同、英哉を見る。
拓真「大川君……」
香澄「深刻にもなるわ。ここに来て、文化祭に関わってる二人が謹慎処分になっちゃっ

たんだから」
英哉「諦めるんですか？　らしくないですね」
拓真「けど、どうしたら良いんだろう……」
英哉「相手の弱みを握ることも、場合によっては必要な手段じゃありませんか？」
芳樹「どういうこと？」
英哉「実は、ある瞬間を抑えた写真があるんです」
英哉、ポケットから何枚かの写真を取り出すと、拓真に渡す。一同、拓真の周りに集まって写真を見る。
拓真「これって……」
しおり「あれ？　これってさ、私と拓真と愛永で覗いてた家庭科室だよね」
愛永「ああ、そういえば夏休み前にあったね、そんなこと」
拓真「あの時、カーテンの中に入ってたの、俺てっきり聡子と亮太だと思ってたんだけど、この二人だったのか……」
写真に映っているのは、家庭科室で抱

き合っている高林と布施である。
香澄「よく抑えたね。大川砲が炸裂したわけだ」
拓真「（写真を次々に見て）それにしても、この二人、お戯れが過ぎるな。めっちゃ絡み合ってるじゃん。八宝菜の野菜とあんかけみたいに」
しおり「やめなさい、その表現」
芳樹「さすが新聞部……」
拓真「あ……そっか、この二人、サッカー部の顧問と副顧問だ」
英哉「（頷いて）」
しおり「どういうこと？」
芳樹「サッカー部の部活動規約」
しおり「え？」
香澄「『部活内での恋愛は禁止』」
拓真「部活内ってことは、当然顧問と副顧問も含まれてる」
しおり「そういうことか……！」
愛永「は〜い！　（と手を挙げて）私に良い

考えがあります。（と写真を手にすると）
拓真君、大川君、私についてきて」
拓真・英哉「え？」
愛永「ほら、早くッ（と出ていく）」
思わず顔を見合わせる拓真と英哉。

○同・廊下
拓真、英哉、愛永が歩いている。
拓真「ねえ、本当に大丈夫なの？」
英哉「あの写真を見せたところで、素直に聞いてくれるとは思えません」
愛永「（立ち止まって）大丈夫だって」
拓真、英哉も立ち止まると、
拓真「何なの、その自信？」
英哉「そうですよ」
愛永「私がやるから、自信があるんじゃない。二人ともちゃんと私を手伝ってね（と先に歩いていく）」
拓真・英哉「（立ち止まったまま）え？」
愛永「（振り向くと）女の武器を、全力で使

うのよ（と拓真と英哉に投げキッス）」
英哉の周囲に何故か風が吹き、その場
にフラフラと倒れこむ。
拓真「（しゃがんで駆け寄って）大丈夫！？」
英哉「はい……」
愛永、妖艶な笑みを浮かべると、スキ
ップしながら去っていく。
英哉「何という力……」
拓真「（ゆっくり立ち上がって）げにおなご
は、おそろしゅうございますな」
英哉「何で時代劇？」
愛永、立ち止まって振り返ると、
愛永「ほら早くッ！」
拓真・英哉「はいッ！」

○同・職員室
布施が仕事をしている――拓真が入っ
てくる。
拓真「失礼します。（と布施のもとへやって
くると）大吾先生、ちょっとよろしいです

か？」

布施「え？　ああ、良いけど」

○同・会議室

拓真、愛永、英哉、布施が話している。

布施「だから、謹慎はもう決まったことなんだ。今更覆すなんて無理に決まってるだろ」

愛永「ええ、そんなこと言わないでくださいよ。可哀想じゃないですか」

布施「規約に書いてあるんだから、しょうがないだろ。（と立ち上がると）その話はもう終わり。俺、戻るからな」

と、出ていこうとすると、後ろから愛永が布施に抱き着く。

愛永「（囁くように）待って……」

布施「あッ……！」

×　×　×

稲光が落ちる。

×　×　×

拓真、ポケットからスマホを出すと、

布施と愛永の瞬間を写真に撮る。

布施「おい。何撮ってるんだよ」

拓真「先生、この写真を流出されたくなければ、今すぐ亮太と聡子の謹慎を解いてください」

布施「こんなやり方して、恥ずかしくないのか？　お前、生徒会長だろ。こんな写真だけで、俺を動かせると思ってるのか。今の技術じゃ、写真の加工や編集なんて簡単にできる。（と英哉に）なあ、新聞部の部長なら、そういう技術があることぐらい知ってるよな」

英哉「はい。では、こちらはどうでしょう。現像してすぐの、出来立てほやほやの写真です。とても加工ができる量ではありません」

と、ポケットから布施と高林の抱き合っている例の写真を見せる。

布施「これは……」

英哉「どうです。これじゃあ、編集なんてで

きませんよ」
拓真「部活動規約に『部活内での恋愛は禁止』と書いてありましたね。部活内ということは、顧問と副顧問だって、当然恋愛は禁止ですよね」
布施「……」
拓真「『顧問は例外』という文面もありませんから、規約に則ると、大吾先生だって処分の対象になるんじゃないでしょうか？」
布施「それは……」
拓真「（写真を見せながら）布施殿、お戯れが過ぎますぞ」
と、ドアが開き、しおり、芳樹、香澄が入ってくる――拓真、しおり、芳樹、愛永、英哉、香澄で布施を囲む。今にも泣きそうな顔になり、その場にしゃがみ込む布施。
ゴロゴロと雷鳴が響いている。

○島浦家・玄関

インターホンの音がし、亮太がドアを開ける――拓真と芳樹が来ている。

拓真「おいっす」

亮太、不機嫌な顔のまま何も言わず、ドアを閉めようとする。

拓真「（止めて）ちょちょちょちょちょ、閉めないでよ。ねえ、閉めないでってば」

芳樹「心配してたんだぞ、ＬＩＮＥも既読にならないし」

亮太「何の用だよ、二人して」

芳樹「せっかく、良い情報知らせに来たのに」

亮太「良い知らせ？」

拓真「亮太と聡子の謹慎が無しになったの」

亮太「は……？　え、マジで……？」

拓真「拓真沢村ネットワーク、略してＴＳネットワークを使えば、二人の謹慎を解くぐらい簡単なんだから」

亮太「じゃあ……」

芳樹「二人とも、文化祭に出れるんだよ」

亮太「ありがとう……ありがとうッ……」

抱き合う拓真、芳樹、亮太。

○青竹高校・全景

○同・中庭

テントを立てている生徒たち。

○同・3年1組教室

机の並び替えをしている生徒たち。

○同・3年2組教室

教室の飾り付けをしている生徒たち。

○同・生徒会室

拓真、香澄、高林が事務仕事に追われている。

高林「どう？　今のところ、準備は順調？」

香澄「はい。各クラスの出店も問題なく」

拓真「今、体育館ではステージ企画のリハーサルやってて、主に音出しと通し確認を。

ミスコンは、来場者への公開を本番だけにするので、簡単な流れだけの確認しています」

高林「（微笑んで）そっか。ようやく明日本番だね。長かったようで、あっという間だった。いろいろあったけどね」

拓真「ええ。あとは、もう本番を残すのみです」

と、走ってくる足音が聞こえ、芳樹が入ってくる。

芳樹「拓真、大変ッ……。しおりが」

拓真「しおりが、どうしたの！？」

○同・３年３組教室

机が端に並べられ、生徒用控室となっている。

左足にギプスを巻いたしおり――しおりを囲うように座っている拓真、芳樹、愛永、聡子、亮太、香澄、高林。

しおり「本番前日に、ごめん……」

香澄「まさか最終リハーサル中に骨折するなんて……」
しおり「準備運動ちゃんとしてたんだけどな……」
拓真「明日、どうするの？」
しおり「足の負担のない程度に、役割分担の仕事はするよ」
亮太「けど、これじゃあ明日のアイドルステージ立てないよね」
芳樹「楽しみにしてたのにな……」
愛永「今更、フォーメーションなんて変えられないしね……」
高林「出場辞退する？」
聡子「そんな……」
高林「けど、もう本番は明日なんだよ。パフォーマンスを見せる以上は、今から代役見つけて練習する時間なんてないでしょ」
しおり「（笑って）あ、大丈夫。その点はご心配なく」
拓真「いやいや、ご心配するわ。お前がこん

な状況になって、明日どうやって本番迎えるんだよ」
しおり「（得意げに）強力な代役を見つけちゃったから」
一同「代役？」
と、英哉が入ってくる。
拓真「え、まさか英哉が代役？」
英哉「僕なわけないでしょ！」
拓真「それもそうか」
英哉「（廊下に向かって）どうぞ」
一同、訝しい顔――花凛が入ってくる。
花凛「失礼します」
一同「花井花凛！」
花凛「すいません。結局準備ほとんど参加できなくて」
拓真「まあ、しょうがないよ。アイドル活動忙しいもんね」
愛永「まさか、花凛ちゃんが代役？」
聡子「え？」
しおり「そのまさかだよ。私たちがやる楽曲

って、三曲とも、花凛ちゃんがセンターを務めるアイドルグループ『Jump Evolution』の歌でしょ。しかも私の立ち位置はセンター。本家本元のセンターである花凛ちゃんが代役をするなんて、これほど心強いことないでしょ」

亮太「でも、本番は明日なんだよ？　振付とか歌詞とか大丈夫なの？」

花凛「はい。３曲とも、歌詞も振付もちゃんと頭の中に入ってるので。今晩、最終確認すれば問題なく行けます」

芳樹「すごッ……」

香澄「さすがだわ……」

高林「けど、芸能活動のほうは良いの？」

花凛「木崎プロデューサーにも相談したんです。そしたら、快く出してくれました」

拓真「何だ、あのハゲチャビン、ちゃんと理解してくれてるんだ。胡散臭いプロデューサーだと思ってたけど」

しおり「拓真（とたしなめる）」

高林「お口が過ぎますよ」
拓真「まあ、でもこれで、何とかなるんだ」
愛永「良かった。じゃ、今から体育館行って、リハーサルしよう。（と高林に）良いですか？」
高林「もちろん。最高のパフォーマンスにするために、練習しといで」
愛永「は～い。（と花凛と聡子に）行こッ。（としおりに）しおりも一緒に来て」
花凛・聡子「はいッ」
しおり「ＯＫ！」
と、出ていくしおり、愛永、聡子、花凛。
芳樹「俺も何か手伝おうか？」
亮太「俺も行く！」
と、出ていく芳樹と亮太。
香澄「（高林に）梢先生、今日は随分素直なんですね」
高林「（動揺を隠して）そうかな？」
拓真「あの～」

高林「……？」
拓真「（真顔で）何かあったんですか？」
お互いの顔を見て笑い合う英哉と香澄。

○同・校長室（夕）
西園寺が仕事をしている――机の前で立っている藤倉。
藤倉「文化祭の準備は、滞りなく終わったそうです」
西園寺「では、後は本番を迎えるだけということですね」
藤倉「はい」
西園寺「生徒たちの状況は、どんな感じですか？」
藤倉「どんな感じと言いますと？」
西園寺「学校全体の雰囲気です」
藤倉「（思わず笑顔になり）それはもう、一致団結とはまさにああいうことを言うんですね。生徒一同、文化祭を楽しむために準備にも力が入って」

藤倉に冷たい視線を送る西園寺。
藤倉「（ハッと我に返り）申し訳ございませんでしたっ」
　　憮然とした顔の西園寺。
○沢村家と時田家・ベランダ（夜）
　　拓真としおりが話している。
拓真「足、大丈夫なのか？」
しおり「まあね。これも後になれば笑い話になる良い思い出になると思う」
拓真「そっか」
しおり「うん」
拓真「なあ、しおり」
しおり「何？」
拓真「ありがとう」
しおり「どうしたの急に？」
拓真「今日の準備まで、本当にいろいろあったけどさ、それでもここまで来れたのは、しおりやみんなのおかげ」
しおり「私に実行委員長をお願いしたことか

ら、始まったんだもんね」

以下、各シーンがスローモーションの回想映像として。

×　×　×

青竹高校・新聞部室

拓真、芳樹、高林が話している。

拓真の声「実行委員長の募集が誰も来てなくて」

×　×　×

青竹高校・生徒会室

拓真、香澄、高林が話している。

拓真の声「香澄に今から見つけて来いって言われて」

×　×　×

青竹高校・3年1組教室

しおりに土下座をしている拓真。

拓真の声「それで何とかしなきゃと思って、しおりに頭下げて」

×　×　×

沢村家・拓真の部屋

ステージ企画の相談をしている拓真、しおり、芳樹、愛永、聡子、亮太。

拓真の声「みんなで、ステージ企画の話を相談して」

×　×　×

青竹高校・生徒会室

美味しそうにベルギーワッフルを美味しそうに頬張っている香澄。

拓真の声「香澄とも、何とか和解できた」

×　×　×

青竹高校・校長室

泣き崩れる拓真。

拓真の声「校長には、散々な目に遭わされて、挙句の果てには泣かされてさ」

×　×　×

青竹高校・生徒指導室

息を切らして拓真が、ドアを開けて勢いよく入ってくる。

話していた聡子、亮太、柳本、布施、高林が、一斉に拓真に振り向く。

拓真の声「亮太と聡子の件も、最初はどうなるかと思ったけど」

×　×　×

青竹高校・会議室

布施を囲んでいる拓真、しおり、芳樹、愛永、英哉、香澄。

拓真の声「まあ最後は、ある意味では強行突破だった」

×　×　×

時田家・しおりの部屋

口論になっている拓真、しおり、芳樹。

拓真の声「あ、しおりと芳樹のこともあったね」

しおりの声「それは文化祭関係ないじゃん」

×　×　×

回想戻り。

拓真「いやいや。あれだってさ、二人ともが文化祭の実行委員会やったから、大分距離縮まったんじゃないのか？」

しおり「まあ……それは否定できない」

拓真「この約三ヶ月は、俺にとって忘れられない、濃い三ヶ月だった。明日で文化祭が終わって、生徒会の任期も終わっちゃうと思うと、何だか寂しいな」

しおり「去年の前期に書記、後期に副会長、それで今回が会長。通算一年半か」

拓真「うん。長かったようで、短かったよ。俺の生徒会人生」

しおり「まあ、生徒会終わっても、私たちの人生、まだまだこれからだけどね。だって、まだ成人にもなってないんだから」

拓真「そうだよな」

しおり「明日が、私たちの晴れ舞台。全力で、楽しもう」

拓真「うん」

笑い合う拓真としおり。

○青竹高校・校門前（翌）

『青竹高校文化祭』と装飾された看板が立てられており、ぞろぞろと客が来

訪してくる。

○同・廊下

生徒や職員、来訪客の行き来が激しい。

○同・校長室

西園寺が仕事をしている――ノック音が聞こえる。

西園寺「はい？」

と、高林が入ってくる。

高林「失礼します」

西園寺「どうしました、高林先生」

高林「文化祭、ご覧にならないんですか？」

西園寺「仕事が溜まってますから」

高林「今日まで、生徒たちは一生懸命準備してました。校長先生がなさった賛否両論ある改革に、生徒たちだって私たちだって動揺してることもありましたが、それでも今日を迎えることができました」

西園寺「……」

高林「改革が悪いと言ってるわけではないんです。ただ、学校は生徒たちのためにあります。改革をして、生徒が離れていったら、それこそ元も子もありません。今日の生徒たちの姿を見て、校長先生の判断が本当に正しいのかどうか、一度よくご検討いただきたく思います」

西園寺「……」

高林「突然、失礼なことを申し上げました。ただ私は、生徒たちのことが大好きで、この仕事を天職だと思ってます。教師になって十年、この年で生徒会主任を任されたときは正直不安でした。でも今は、自信をもって生徒会主任の仕事ができていると思っています。それは、あの子たちがいるからです」

西園寺「……」

高林「どうか、今日の晴れ舞台を、その目で直接、ご覧いただければと思います」

西園寺「……」

高林「失礼しました」
一礼して去っていく高林――険しい顔だが、動揺している西園寺。

○同・体育館
『一週間の歌』を大熱唱する篠宮――観客席には藤倉、柳本、松坂しかいない。
柳本「俺たちしかいないですね」
藤倉「まあ、教頭先生が満足してれば、それで良いんじゃないですか」
柳本「校長先生も見にいらしたら良いのに」
藤倉「多分来ませんよ、校長は」
松坂「（スマホで篠宮を撮影して）これは、バズる予感がします」
柳本「動画撮ってるんですか？」
松坂「そりゃ、映像同好会改めゆーちゅー部の顧問ですから」
気持ちよく大熱唱している篠宮。

○同・保健室

メイド姿の愛永がスマホを持ってライブ配信をしている――隣に一緒に映っている畑山。

愛永「青竹高校文化祭やってま～す。私は三年一組の教室でメイド喫茶やってます。あと、ステージ企画もやるので、ぜひ来てくださいね～。あ、紹介します。保健室の美鈴先生です」

畑山「美鈴です。文化祭に来ないと、痛い目に遭わせちゃうぞ」

愛永「青竹高校文化祭に～」

愛永・畑山「来てね～（と手を振る）」

○同・体育館

バンド演奏を披露する水谷、竹平、布施、陣内、森――水谷がキーボード、竹平がドラム、布施がボーカル、陣内がベース、森がギター。

観客がそれなりに入っており、盛況と

なっている。

○同・3年2組教室

割烹着に着替えた拓真が入ってくる―

―芳樹と亮太が迎えると、

芳樹「似合ってるじゃん」

亮太「良い、すごく良い。（とスマホを出して）写真撮っとこう」

拓真「いくらおふくろの味だからって、何もこんな格好……」

芳樹「けど、おいしいと思ってるだろ」

拓真「うん」

亮太「やっぱり」

拓真「よく用意したね」

芳樹「だろ」

と、客がぞろぞろと入ってくる。

拓真「（女将風にふるまって）まあ、いらっしゃいませ。ささ、どうぞ。こちらの空いてる席へ。（と入ってきた客に）さあ、おいでませおいでませ。どうぞこちらへ。ご

注文が決まりましたら、お声がけください」
芳樹「（亮太に）やっぱり、あいつが楽しんでるのが一番だな」
亮太「ああ」
愛想よく接客をしている拓真――そこへ、しおりが入ってくる。
拓真「いらっしゃい」
しおり「何て格好してんの」
拓真「ここは、おふくろの味だから」
しおり「（拓真、芳樹、亮太に）三人とも、そろそろ時間だよ」
亮太「え、もう？」
芳樹「よし行くか」
拓真「ええ、せっかく着替えたばっかなのに」
しおり「ほら、早く行くよ！」
拓真・芳樹・亮太「了解！」

○同・体育館
観客で満員――出囃子が聞こえ、観客たちが拍手をする。

上手から登場する拓真、芳樹、亮太――センターマイクのところまでやってくると、

拓真「どうも、三年二組の沢村拓真です」

芳樹「同じく、三年二組の龍野芳樹です」

亮太「同じく、三年二組の島浦亮太です」

拓真「三人合わせて」

拓真・芳樹・亮太「３ＬＤＫで～す」

○同・中庭

鉢巻を巻いた香澄が、鉄板で焼きそばを焼いている――隣でフランクフルトの仕込みをしている英哉。

香澄「（威勢よく）はい、いらっしゃい！　焼きそばとフランクフルト美味しいですよ」

英哉「随分気合入ってますね」

香澄「当たり前じゃん。この日のために、私たち頑張ってきたんだから」

英哉「それもそうですね」

香澄「はい、美味しいよ！　焼きそば五百円。

ソース焼きそばと塩焼きそば、両方ありますよ。いかがですか～！」

英哉、スマホを見て時間を確認すると、

英哉「ごめんなさい、少し抜けてきます」

香澄「いってらっしゃい！！　（と通行客に）お客さん、焼きそばいかがですか～！」

○同・体育館

ミスコンエントリーの生徒たちがステージに次々と出てくる。観客席から歓喜の悲鳴が上がっている。

上手舞台袖で、書類を見ながら確認している拓真としおり――その横をエントリーしている男子生徒が一人通り過ぎていく。

拓真「ねえ、あんな子うちの学校にいたっけ？」

しおり「え？」

と、ステージを見る――一人のイケメン生徒が歩いている。

しおり「え、誰？」
と、拓真と一緒にエントリーシートを見る。エントリーシートの氏名欄に『大川英哉』の文字。
しおり「大川英哉？　どっかで聞いたことある名前だね」
拓真「え？　まさか、あの英哉？」
しおり「嘘ッ……？　新聞部の？」
と、もう一度ステージを見る――爽やかなイケメンになっている英哉に、観客たちの悲鳴が聞こえる。
しおり「え～～～～！？」
拓真「（唖然と）ありゃ、優勝だわ……」

○同・3年1組教室
メイド喫茶の装飾がされている。
メイド服の愛永と聡子が接客をしている――花凛が入ってくると、
花凛「愛永先輩、聡子先輩、そろそろ準備の時間です」

愛永・聡子「は～い」

○同・体育館

満員となっている観客席。

花凛がセンター、両サイドに愛永と聡子の配置で、ダンスしながら歌っている――三人とも楽しそうにパフォーマンスを披露している。

観客席の隅で見ているしおり――そこへ、木崎が入ってくる。

しおり「木崎プロデューサー……」

木崎「以前は、どうも」

しおり「いえ……」

木崎「（花凛を見て）その笑顔だ……。何事も、自分が楽しめば、観客にもその楽しさは伝わる」

しおり「そうですね……。私は、それを拓真から教わりました」

木崎「ああ、あの生徒会長の」

しおり「ええ」

木崎「あの子はきっと、良い大人に成長する
でしょう。支えている君もね」
しおり「私、拓真とは家が隣同士なんです。
私は早くに父を亡くして、あの子は教員だ
った両親が離婚して父親に引き取られて。
お互い、そういう事情があったので、いつ
の間にかお互いに助け合ってたんでしょう
ね」
木崎「なるほど」
しおり「こんな経験をさせてくれた拓真には、
感謝しかありません」
×　×　×
舞台袖で、花凛たちのステージを見て
いる拓真――そこへ、西園寺がやって
くる。
西園寺「結局、成功させたのね」
拓真「校長……」
西園寺「制限もあったり、トラブルもたくさ
んあったのに、最後まで諦めずによくここ
までやったわ。来場者もたくさん見えてる

みたいだし。感心するわ」
拓真「ＮＥＶＥＲ　ＧＩＶＥ　ＵＰ！」
西園寺「え？」
拓真「（苦笑して）我が家の家訓でしょ。忘れたの？」
西園寺「そんなこと覚えてたんだ……」
拓真「当たり前だろ」
西園寺「強がりなところ、父親譲りかしら」
拓真「いや、どちらかと言えば母親譲りじゃないかな。得意科目が社会なのも、母親譲り。だって父さん体育教師なのに、俺は全然運動音痴だから」
西園寺「……」
拓真「小さい時からテレビで時代劇見せられて、たまに変な言葉遣いになるのも、母親の影響だね、間違いなく」
西園寺「まだ見てるんだ」
拓真「習慣になっちゃったからね」
西園寺「そう……」
拓真「一生の思い出に残る文化祭になった。

終わり良ければ総て良し。それで十分」

西園寺「……」

拓真「無理を通させてくれて、ありがとう……」

西園寺、微笑を浮かべると、去っていく――見送る拓真。その顔は明るい笑顔。

○エンディング

オールキャストで、体育館ステージでカーテンコール。登場人物が順番に出てくる。最後は愛永、英哉、芳樹、しおり、そしてセンターに拓真が来る。主題曲に合わせてダンスを踊る。

終